家庭雜誌

第貳拾八號

女子教育の事　餘り多く學問攻に攻め附け、學問に食傷せしめぬ樣ありたし、

歐洲諸國王家の片影　備に墺太利帝室を見るべし、

植物の生涯　造化の心事は、彼等に對することに由て少からず讀まるべし、

乳母の歌　さらば和子達あそびてん、くらくなりなば大人しく、家にかへりてれぶりませ、

黄金事蹟　一事千金萬金のみならず、

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

長野縣尋常中學校教諭 石橋多喜郎君著

家計簿記學

製本既成

全一册洋裝 ● 正價金十二錢 郵稅四錢

一家の盛衰は金錢出納の注意如何に基き金錢の出納を最も明瞭にするは簿記法に依るの外なし本書は一家經濟の收支を最も明かにする簿記法を說く之に由れば家計の出納を明かにするは勿論兼て普通の簿記法に通曉することを得べきなり

● 新式商業簿記全書 全 正價四十錢 郵稅八錢

● 商家實用商業帳簿組立法 全 正價十五錢 郵稅六錢

● 帳合活法 全 正價十二錢 郵稅四錢

● 家政の栞 全 正價二十錢 郵稅六錢

● 家政學 二册 正價六十錢 郵稅十錢

● 家政整理法 全 正價十六錢 郵稅六錢

● 家事經濟書 全 正價十二錢 郵稅四錢

● 母のつとめ 二册 正價五十錢 郵稅六錢

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

● 全國新聞雜誌廣告大取次 ●

家庭雜誌國民之友國民新聞を始全國新聞雜誌への廣告取次方迅速と確實は勿論割引大勉強にて御用便可仕候電話八百五拾壹番

東京々橋區瀧山町拾壹番地

● 弘報堂 ●

▲ 尋常小學 女生徒募集 ●

今般高等女學科ニ連續スベキ女兒尋常
本館小學科ヲ設ケ第一年級第二年級ノ生徒ヲ募集ス
入學望ミノ者ハ來五月十日迄ニ申込ムベシ月謝ハ金五
拾錢○規則書入用ノ者ハ郵劵二錢ヲ添ヘテ申込ムベシ

二十七年四月 麹町區虎ノ門內 東京女學館

◎牛乳ノ如ク飲ミ易ク且好味ナリ

◎此スコット乳薬中ニアル肝油ハ如何ナル胃弱ノモノモ少シノ滞リナク容易ニ服用シ得ル樣ニ調化シアルモノナリ

◎筋肉ノ製造者トシテ有名ナルスコット乳薬ハ肺病、瘰癧、精神疲勞、小兒ノ衰弱症及慢性ノ咳嗽ヲ治スルニ最好最良ノ調劑トシテ夙ニ歐米諸大醫ノ賞賛措カザル處ナリ

◎龍動スコット及ハウン謹製

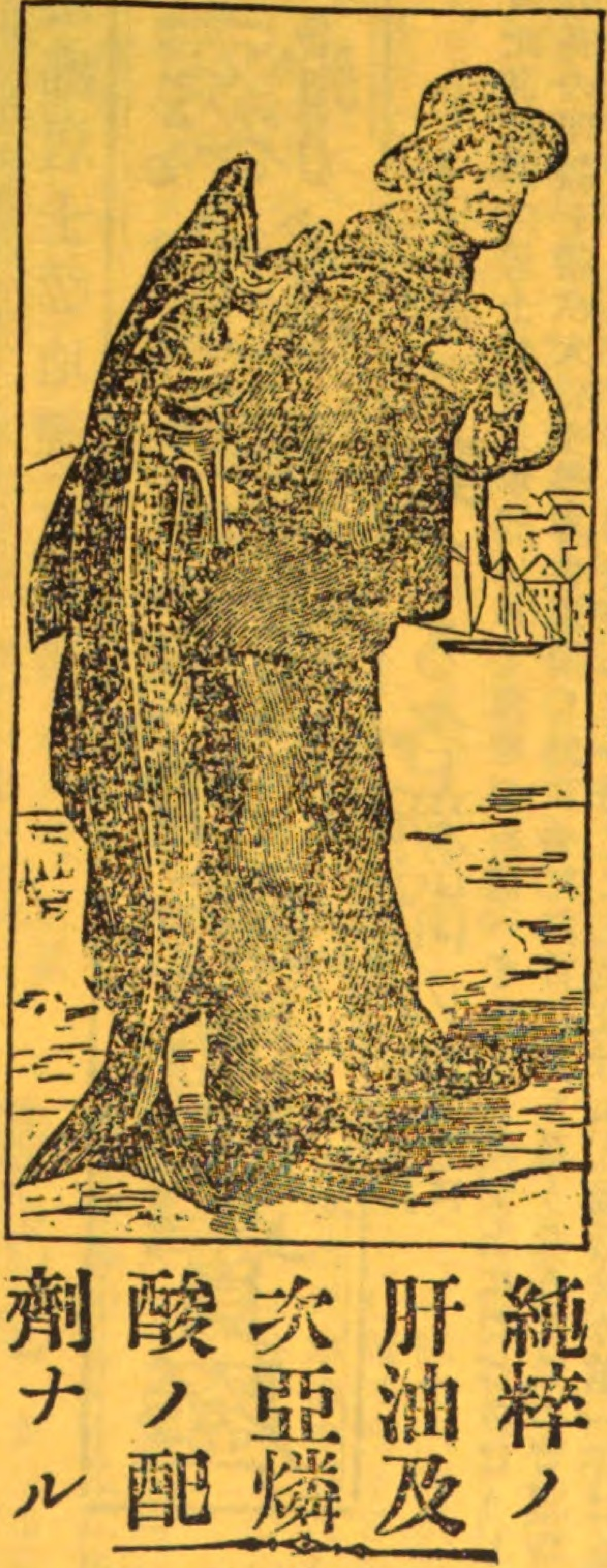
日本一手特約販賣所

米國貿易商會

橫濱廿八番

神戸十七番

◎賣捌所ハ全國至ル處ニアリ



純粹ノ肝油及次亞燐酸ノ配劑ナル

スコット乳薬

櫻痴居士福地源一郎著

懷往事談 附 新聞紙實歷

紙數二四八頁
定價二十錢
郵税四錢

本書に對する各新聞の批評

● 此書は櫻痴居士が安政年間始めて幕府のお抱へとなりて外交上にたづさはりし事より後ち日報社に入りて社長の印綬を帶び大に文學界に雄飛し終に去て狂言作者となりたるまでの實歷談を居士自ら筆を把りて國民之友に投ぜしものなるが今回表裝して一冊となし民友社より發行せり前一半は近世の小外交史とも謂ふべく後一半は純然たる新聞叢史にして宛然親しく居士と對座して舊話を聞くの思ひあり其中に得意談あり大に幕政の外交如何を知るに足るものあり薩長藩閥政府の施政方針を窺ふに足るものあり笑ふべきものあり悲むべきものありて讀去り讀來れば轉た感慨に堪へざる者多し而して事は居士一身に關すと雖も亦社會の反射鏡として見るも可ならん(國會)

● 身舊幕に吏として志を得る能はず後明治政府の知遇を受けたるも事復た成らず去りて新聞事業に從ひ大に驥足を伸ばさんとしたるも亦全く畫餅に屬し空しく文苑の中に隱るゝの已むを得ざるに至れりとは氏自ら嘆する所而して其事歷を筆にしたるは是れ此書なり氏は以て自己三十餘年間の懺悔錄と云ふと雖も幕末外交の狀況を論ずる所、新聞紙實歷を叙ふる所、或は幕末の失政史として又は新政府の殷鑑錄として一讀再思を要すべきもの尠からず其行文の如きは氏が獨得する輕妙の躰、一たび之を手にせば措くに忍びず唯だ卷の終り易きを憂ふるのみ(報知)

● 懷往事談は新聞紙實歷と共に國民之友に出でたる櫻痴居士の著なり居士の小說よりは面白き所多し(時事)

● 前略其の記述する事實は近世の小外交史と爲すに足る(都)

發兌元 民友社
東京市京橋區日吉町四番地

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

德富猪一郎著

三版 文學斷片

本書に對する各新聞の批評

紙數二八五頁
定價十五錢
郵税四錢

◎「靜思餘錄」と形を同じうせる此の書は國民叢書の隨一にして蘇峯德富氏の著作なり民友社發兌『靜思餘錄』を讀みて皷吹せらるゝ所ありし者はまた此の書を讀みて皷吹せらるゝ所あらん、然り彼の書を愛讀せし者は此の書を讀まざるを得ざるべし『文學斷片』は文學的批評家としての民友子を代表す、彼れが文學の本義、彼れが信ずる所の詩人の本分、彼れが當にかくあるべしと信ずる小說の性質等は例のマコーレー風の流暢なる、時としては福澤流の通俗なる、又時としてはエマルソンに似たる觀念を含める、一種特色ある文章のうちに解し易く、面白く、又有益に說かれたり、讀者若し此の書によりて彼れは何故に湖處子の『歸省』を稱せしか、又何故にユーゴーを愛し、何故に山陽を激賞せるか等を疑はゞ其の文學と世間との關係に於ける觀念を察する餘あるべし(早稻田文學)

◎編者自から謙して、落葉を輯めたりと云ふ。落葉の秋天にのみ積もるとを見れば、其の一堆も亦以て時勢を證するに足らん。此書の著者は蓋し非文學者ならん。然れども、人生の或る部分を看得し、直ちに其皮毛を剝いて本相を破現するの天才に於ては、著者は確かに「一種の文學者なり、一種の詩人なり。」著者が玲瓏たる批評眼は、正さに經世的文界の動靜に向ふて射れり。此書、明治二十年七月以降、同廿六年十二月に至る、凡そ六年間の此種の動靜を看破したる一小史として重んずべし。此書が、后ち十數年に生存すべき使職も亦た此にあらん。著者が抱負する所も亦必らずや是ならん。(評論)

◎德富猪一郎氏が國民之友に掲げたる文中文學に關する數十篇を蒐めたるものなり氏の自叙に落葉積で堆をなすも決して精金美玉となる能はずと謙遜したれども文章の絢爛字句の巧妙優に一家をなせり世の少年一讀して俗襟を洗ふて可なり(日々)

◎國民叢書第五卷として形はれたるものにして元國民之友幷に國民新聞紙上に出でたる蘇峯氏の文學の意見を上し蒐て冊子とせり氏は自ら稱して非文學者の文學談只他山の石たらむと云ふと雖も氏の有する文想詩思は自からその一派の文學者たるとを此篇に示せり(郵便報知)

◎蘇峯氏の日常新聞雜誌的の文を集めたる者長篇は崇山喬嶽の如く小品は精金美玉の如し(中央)

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

新刊

第四國民小說

發賣

定價拾五錢郵税四錢

小說の時節は來りぬ。正に是櫻花謝し盡んとして煙雨蕭々たるの時、出て遊ばんか、落花泥濘を奈何、居て語らんか、獨坐友なきを奈何。寧ろ若かんや幽齋塵なきの處、新綠染むるが如き邊、一榻の上、徐ろに新篇を繙かんには。雖然書の擇むべきは殊に小說に於て甚し、若し撰擇宜きを得ざるか、其害測る可からず、故に小說を擇ぶは快樂に乘るに品性を養ふに足る者ならざるべからず。而て世間果して其書あるか、吾輩は左の諸篇を除ては容易に之を答る能はざる也。

- 千人會　思軒居士
- 何處に？　嵯峨の屋主人
- 羅の菊　小中村義象
- 七株松　落合直文
- 未期の言　驚濤生
- 不二の高根　麗水生
- 懺悔　秋風閑主人
- 家妻　湖處子
- 白薔薇　壽湖仙史譯
- 夏休　嵯峨の屋主人
- 田家新年　麗水生
- 物語の物語　秋山生譯
- 千島大尉　弦齋居士
- 盲新婦　槐南居士

北村門太郎著

十二文豪 第六卷

エマルソン

定價十八錢 郵税四錢

本月二十四日發賣

日耳曼のゲーテ、英國のカーライルと鼎立して、物質的米國に一團の靈氣を吹き込みたる十九世紀の大敎師、其流風餘韻今日に到て猶いまだ已まざる敎吹者、哲學者たり詩人たり預言者たる米國コンコルドの哲人を紹介するは十二文豪の第六卷「エマルソン」也、

エマルソンは何人ぞ、如何の時代に生れ、如何に生長し、如何なる事業を爲し、如何の感化を及ぼせしぞ、大凡其人物、經歷、世界觀人生觀、其文學、其事業感化其引率したる諸遊星、其思想界に於ける位置、殘る所なく明麗切當に敍論したるものは「エマルソン」也、

十九世紀思想界の巨人中一頭高く聳へ起てるエマルソンの事に就て知らんと欲するの諸君は、刮目して本篇を見よ

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

民友社出版書概目錄

- 國民叢書 人物管見　定價拾五錢　郵稅二錢
- 國民叢書 青年と教育　定價拾五錢　郵稅四錢
- 國民叢書 靜思餘錄　定價拾五錢　郵稅四錢
- 國民叢書 文學斷片　定價拾五錢　郵稅四錢
- 吉田松陰　定價五拾錢　郵稅八錢
- グラッドストン　定價貳拾錢　郵稅四錢
- 武雷土　定價拾五錢　郵稅四錢
- 格武電　定價貳拾錢　郵稅四錢
- 格朗空　定價貳拾錢　郵稅四錢
- 伊太利建國三傑　定價貳拾錢　郵稅四錢
- 幕府衰亡論　定價卅五錢　郵稅六錢
- 新日本史 上　定價四拾錢　郵稅六錢
- 新日本史 中　定價三拾錢　郵稅六錢
- 近世歐米 歷史之片影　定價貳拾錢　郵稅四錢

- 第二之維新　定價拾錢　郵稅貳錢
- 國民的大問題　定價貳拾錢　郵稅四錢
- 政黨論　定價廿五錢　郵稅四錢
- 英米佛 比較憲法論　定價貳拾錢　郵稅四錢
- 排偽哲學論　定價拾貳錢　郵稅貳錢
- 新日本之青年　定價貳拾錢　郵稅四錢
- 誕生日　定價拾五錢　郵稅貳錢
- 一語千金　定價五錢　郵稅貳錢
- 第一 國民小說　定價拾五錢　郵稅四錢
- 第二 國民小說　定價拾五錢　郵稅六錢
- 第三 國民小說　定價拾五錢　郵稅四錢
- 歸省　定價拾五錢　郵稅四錢
- 懷舊　定價貳拾錢　郵稅四錢
- 最暗黑之東京　定價拾參錢　郵稅四錢

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

徳富猪一郎著

四版 吉田松陰

定價金五拾錢
郵税八錢

◎試みに社會の耳目たる新聞雜誌評論の一片を掲けしめよ。◉其人物を描くの巧妙なる韓退之マコレーを九原より喚起して松陰傳を作らしむるも是迄ならん（經濟雜誌評）◉世間若し吾人に向ひて讀みて面白きと同時に識見卓拔なる書を近著中に就いて示せといはゞ吾人はまづ此書を推選すべし、（早稻田文學評）◉其文章の明淨流麗、其批評の簡截峭拔、其の眼孔の銳利靈活、其の時勢を寫すの透明深刻なる、其人物を畫くの高妙經捷なる、實に近時の一大雄篇と爲す。（中央新聞評）◉一卷一人物の評傳として、近代、世に出でたる創作に、未だ此書の如く、評眼透明、品藻徹底せしものを見ず、（評論評）

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

平民叢書號外

深井英五著

責任內閣

定價十錢郵税二錢

目錄◉第一、明治の新政◉第二、議會と政府の衝突◉第三、專制政治と立憲政治◉第四、爲政者の責任◉第五、立憲君主と輔弼大臣◉第六、議院と內閣(上)◉第七、議院と內閣(下)◉第八、國民的政府

金玉の憲法ありて立憲政治の美果未だ收められず、議會と政府徒らに抗爭し、立法、行政の兩部常に扞格して、動もすれば國務の曠廢を致さんとするものは抑も何故ぞ。他なし、責任內閣の制、未だ固く定まらざるを以て也。

天皇不可侵の義憲法に昭明せられ之れ尙ほ聖明を煩はし奉るとあるを免れず、動もすれば神聖の天皇をして政爭の孤柱たらしめ奉らんとするの惧あるものは抑も何故ぞ、他なし、輔弼の大臣未だ國民に對して責任を負ふとを肯ぜざるを以て也。

此書政法學の原理に據り、憲政史の事實に基き、責任內閣の意義を論明すること嚴正にして又た適切。以て國家憲制の學理的解說たる可く、以て持局の必要に應ずる實際的指南車たる可し。立憲の美果を擧げ、皇室の尊榮を發揚せんとするの志ある諸君子、請ふ此書に對して一片の同情を惜む勿れ。

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

平民叢書第一卷 十九世紀之大勢　定價拾貳錢 郵税貳錢

平民叢書第二卷 世界經濟上之變動　定價拾貳錢 郵税貳錢

平民叢書第三卷 國家と政府　定價拾貳錢 郵税貳錢

平民叢書第四卷 教育と遺傳　定價拾貳錢 郵税貳錢

平民叢書第五卷 文明之弊及其救治　定價拾貳錢 郵税貳錢

平民叢書第六卷 現時之社會主義　定價拾貳錢 郵税貳錢

平民叢書第七卷 經濟と道德　定價拾貳錢 郵税貳錢

平民叢書第八卷 歷史攻究法　定價拾貳錢 郵税貳錢

平民叢書第九卷 哲學變遷史　定價拾貳錢 郵税貳錢

平民叢書號外 銀貨之過去現在未來　定價拾貳錢 郵税貳錢

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

十二文豪第一卷 カーライル　平田久著　定價拾八錢 郵税四錢

十二文豪第二卷 マコウレー　竹越與三郎著　定價拾八錢 郵税四錢

十二文豪第三卷 荻生徂徠　山路彌吉著　定價拾八錢 郵税四錢

十二文豪第四卷 ヲルヅヲルス　宮崎八百吉著　定價拾八錢 郵税四錢

十二文豪第五卷 ゲーテ　高木伊作著　定價拾八錢 郵税四錢

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

舶來流行夏物澤山着荷

歐洲流行女夏帽子○同小供帽子夏用ハンカチーフ同シヤツ○同靴足袋同皮絹手袋○束髮ピン婦人洋服附屬品等

婦人洋服附屬品商 新橋南金六町一番地 關口商廛

本社電話番號七十番

發行兼印刷人 垣田純朗
編輯人 塚越芳太郎
發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

明治二十七年四月廿五日發行
家庭雜誌第貳拾八號

目録

社説

杣山城……………………（久保田米僊畫）
女子敎育の事（學問攻めの害）……………一

史談

歐洲諸國王家の片影（四）……………三

科學

植物の生活（承前）……………九

文藝

乳母の歌……………殘月樓主人譯…一六
黄金事蹟……………潮處子…一七
もしほ草……………二一
一休の母……………二四

繪畫

畫學の栞（七）……………金仙…二六
無聲詩話（十五）……………二七

家政

十六七の娘……………二八
時間……………三一
無慈悲なる夫妻……………やぎ生…三五
清淨なる厠所……………三六
料理法……………三七
　去らんさする蜜柑の料理
　水上の落花
　鯉の腸づめ
　蒸やき
手藝案内……………三九
　羽織の紋
　絹及び木綿の漂白法
　養蠶術（承前）
社交一斑……………四五
流行の栞……………潛夢…四五
　流行夏向の舶來品
　「ゴム」の製作品
　流行の書簡嚢
　夏向の髪具
　化粧品
　最流行の小兒衣裳

雜録

遺珠顆々……………五〇
杣山城……………五〇

時事一斑

布哇の治外法權撤去……………五一
關西女學の輿論……………五一
日本の科學……………五一
社會警醒の一傾向……………五二
慘酷……………五二
春光若夢……………五二

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google

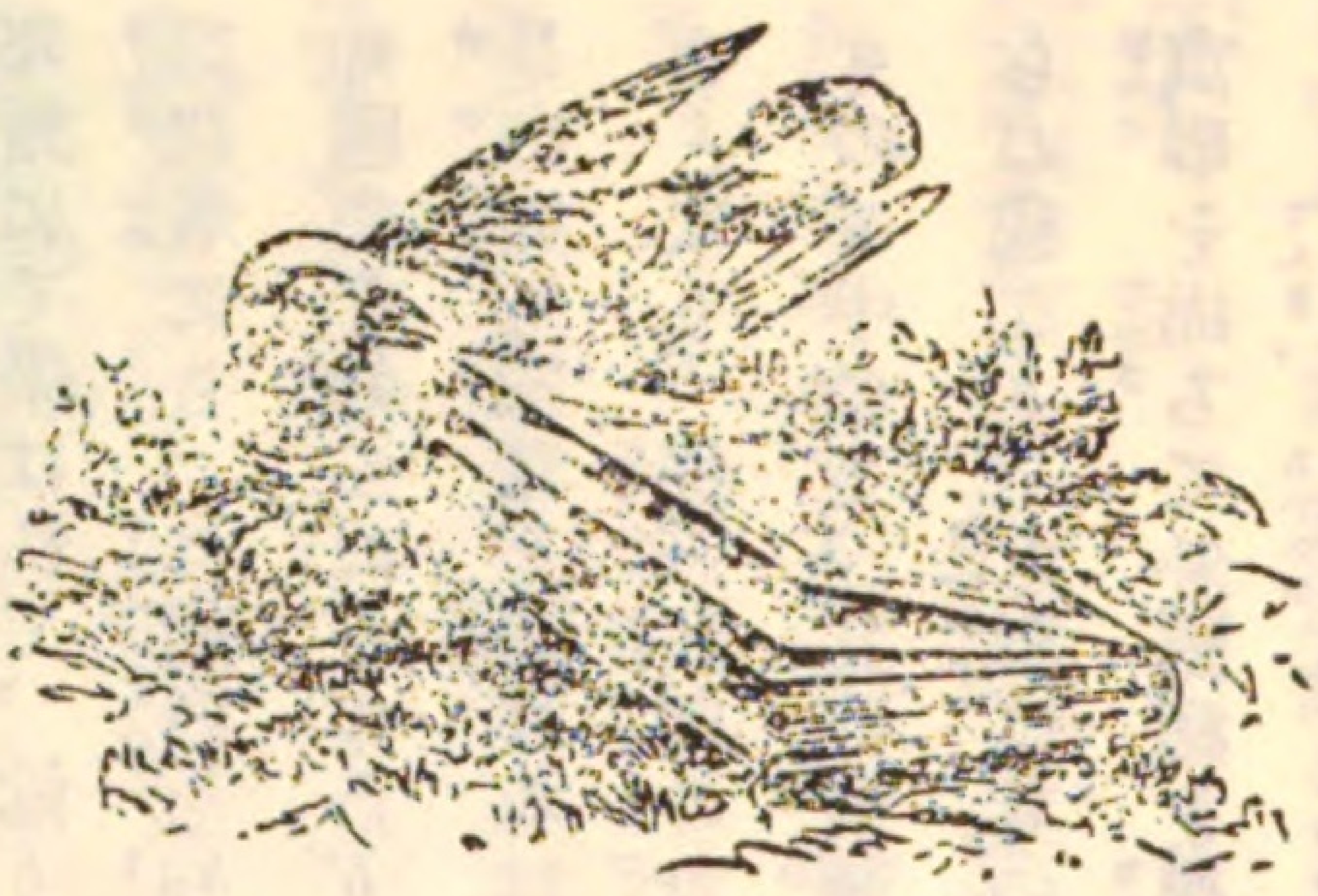
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家庭雜誌第貳拾八號

（明治二十七年四月二十五日發兌）

社説



女子教育の事

學問攻めの害

女兒を持てる、親の第一の心配は、如何なる教育を施す可き乎、又た如何にして教育す可き乎の點なりとす。

女子教育とは、明治社會の新らしき現象にして、一時は社會の流行ともなり、女學校の數も、雨後の草と一般、萠へ出てたり。今日とても尙ほ多くの女學校あり。

吾人は女子教育に就て、多くの理窟を云はさる可し。但た餘り多く學問攻めに攻め附け、學問に食傷せしめぬ樣ありたしと祈るのみ。

我邦の女學校は、外國の女學校その儘のものあり。又た品能き、貴婦人を爲るを目的とするものあり。今一々その長短得失を語らさる可し。併し女學校にさへ入れ置かば、女子の教育は、安心なりと思ふは、大なる過りなり。何となれは今日の女學校は、必らすしも社會普通の程度を目的として、出て來りたるものにあらざれば也。故に學校の吟味、最も緊要なりとす。

學問攻めの第一は、外國語の學習なり。吾人は女子か外國語を學ふの必要なしと云ふにあらす。然れとも女子教育とさへ云へは、外國語を學はねはならぬと思ふは、大なる僻事にあらすや。我邦に於て普通の智識は、

邦語にて學はれて、餘りあり。現に文筆を業とする新聞記者にも、外國語を知らぬものあり。國務大臣にも、外國語を知らぬものあり。然るに我邦の婦人にして、是非共外國語を學はねはならぬと云ふは、實に理由なきとなり。從來我邦の女子にして、外國語を學ひたるもの丶中にて、其の甲斐ありしもの、百人に一人もあらぬ程なり。大概は其の健康を傷り、其の發達を妨げ、萬事を抛ちて外國語を學ひたる結果は、僅かに片言交りに天氣の挨拶が出來、友人との往復文に、二三の外國語を交ゆる位ひに過ぎず。若しそれ外國語を役に立つ程に學び得たるもの、即ち翻譯も出來、讀書も出來之を用ひて差支なきものは、千百人中一人を見るのみ。而して多くの人は、半途にして廢學し、縁附でもしたる後は、讀本すら讀めぬ樣に成り行くもの多し。斯くありても、外國語は是非に學ばせばならぬものにや。世の親たる人達は、篤と考へあり度きとなり。

學問攻めの害は、女子の健康を傷ひ、發達を妨け、精神を害するのみならず。裝飾の學問に、全力を傾けたるの結果は、有用の學問を等閑になすと多し。現に餘りに外國語の勉强に熱中するものは、邦文の書簡すら、立派に書くとは出來ぬものあり。假名の附かぬ新聞すら、サラ〳〵と讀めぬものあり。况んや婦人の嗜みともなる可き、裁縫その他の手工杯は、寄せても附けぬもの多し。是れ實に本末輕重を顚倒したるものと云はざるを得ず。

斯く申せばとて、吾人は誰も皆な外國語を習ふ勿れと云はず。過ぎたるは尙ほ及ばざるが如し。誰れも外國語を學ふ勿れと云ふの間違は、誰れも外國語を學ぶ可しと云ふ間違に同し。若し(第一)女兒彼自身に最も學習するを好み、(第二)其の天才之に傾き、(第三)其の家庭の生活の程度饒かにして、之を學習するの餘裕あり、(第四)或は其の職業上、交際上、是非學習する

の必要あらば、勿論外國語を學習せしめて可なりと思ふ。以上の要件の一々具足せざるも、その一つでもあらば、學習せしめて差支なしと思ふなり。

清少納言、紫式部たらんと欲する人、若しくはたる人は、外國語を學習するの差支なきのみならず、寧ろ其の必要あり。故に斯る人に向ては、吾人は之を奨勵せんと欲す。但だ世間總ての女子に向て、清少納言たるを望み、紫式部たるを攻むるは、寧ろ殘酷の次第と信す。

學問攻めの事は、獨り外國語の學習に限らされども、此れその重なるものなるが故に、先づ此事を一言す。

要するに學問は實用を主とし、装飾を次とす可し。外國語の學習の如きは、總ての場合にあらざるも、多くの場合に於て、装飾品なれば、先づ邦語をもて、實用の學に就かしむることこそ當然なれ。實用を客として装飾を主とすれば、詰り實用も實用とならず。装飾も装飾とならず。其の結果は學問に攻め立てられたる顔色蒼白、痩せ細りたる、多病にして物事に堪へさる神經質の婦人を生するに到る可し。

是れ決して一家の幸福にあらず、又た一國の幸福にもあらず。

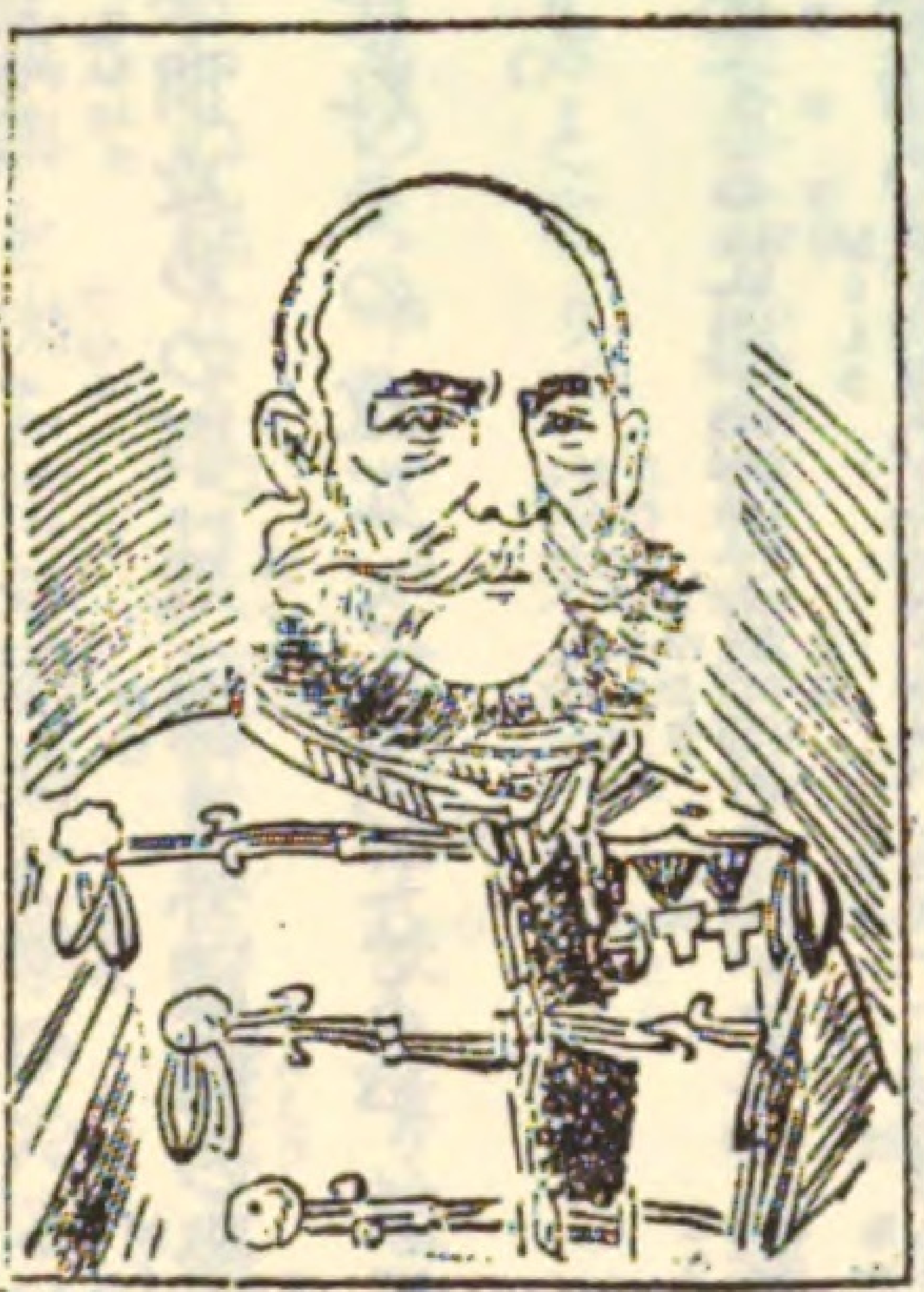
史談

歐洲諸國王家の片影（四）

六、墺地利

現世紀の下半五十年の間に、佛蘭西に破られ伊太利に敗を取り孛露士亞に蹂躙され、外は國威を損し内は國の原素たる各種各族の紛爭已む時なきに拘はらず、依然歐洲諸強國に班するは墺地利なり。其經歴を問へば一の華々しき功名もなく、其力量はと云へば何人も大

器を以て之に許す者なきに拘はらず、依然此困難の位に立ちて民の望を繫がるゝは墺地利帝なり。



墺帝フランシスヨセフの生涯も長きものなり。其幼きや奈破烈翁一世の異なるフランシス一世の膝に抱かれ、稍長じては當時歐洲一の權謀家たりし宰相メテルニッヒに就きて外交の魂膽を覗ひ、十八歲にして叔父フェルヂナンドの跡を承けて困難なる墺地利の帝位に上り。六十五歲の今日まで位に坐せらるゝこと茲に四十七年なり。其位に即かれし時は、宰相メテルニッヒの播きたる禍種まさに蕃生し、匈牙利は反旗を翻し、國の前途は夜の如く黑かりき。フェルヂナンド帝まさに位を退かむとして云はれけるは、墺地利は壯年剛强の君を要すと。斯て壯年のフランシスは帝位に上られぬ。時に千八百四十八年十二月、歐洲諸國人民と王家の衝突尤も盛んなる頃なりき。

今も墺地利王宮の一室に、帝の幼時の逸事を描ける繪畫掲げらる。帝四歲の頃、誕生日に當り諸方より貰はれし玩具を持ちて、奈破烈翁の婦翁なる祖父フランシス老帝とラクセンブルヒの園に遊び居られけるに、たま〲其處に人形の如く立つたる番兵を見て、遊戯打やめてしばし見とれ居られしが、忽ち祖父帝に問はるゝ樣、

祖父樣、アノ番兵は貧窮者でせう？

坊は何故其樣思ふのだ？

彼樣に務をしますもの。

坊、務と云ふものは貧窮者でも金持でも何人でも是非せねばならぬもの、皇子公達でも矢張番兵同樣出精せねばならぬものぢや、が此男は貧窮者、此貨幣を坊が持つていつてやるがよい。

言ひつゝ老帝一葉の紙幣を取り出て與へらるれば、少皇子喜び勇み紙幣をつかんで番兵の傍に走り寄り、

サア、御まへ、此は祖父樣が御まへに下さると。

然れど番兵の規則は嚴重にて頭を掉つて取らざれば、皇子は甚く失望の樣子なるを、老帝打見て打笑み、

フランツ、其は番兵の彈丸箱に入れてやるがよひ。

然るに皇子のたけ矮くして番兵の腰に及ばざれば、老帝は皇后と諸共に皇子を抱き上げて紙幣を番兵の彈囊に入れしむれば、皇子は快然と

祖父樣、此れで番兵もモウ貧窮しますまい。

初めて慈善の味を此時に知られける。

六歳より帝は嚴敷教育を受け、其結果として少年にあるまじき神經質の徵候見へ、十二三の頃は馬に乘ることを甚く恐れて、乘馬の度に涕泣されしと云ふ。頓て軍事の教育を受け、十六の年にはメテルニッヒに就て外交の秘密を傳習され、十七歳の年より已に皇帝の名代として處々の式場に臨まれける。曾て匈牙利の左る式場に於て、純粹なる地方語を以て一場の演說せられければ、匈牙利人民驚喜して喝采し、數月の後匈牙利愈〻フエルヂナンド帝に向て反旗を翻すや、匈牙利議會に於て一士立ち上りて曾て我地方語を以て演說したる愛す可き彼皇子を以て我匈牙利未來の國王と爲さんと發議し、喝采の聲盛に起れり。此發議をなしたるの士こそ、匈牙利人民の首領として獨立の軍を指麾したる十九世紀歐洲の一人傑、去三月伊太利チユリンの謫居に九十二歳の高齡を以て清操苦節の一生を終へたるルイ、コッスート其人にぞありける。

十八歳の年愈墺帝の冠を戴かるゝこと定まるや、帝は歎じて云はれける、吾青春よ、サラバ、サラバと。帝は實に此れより後の任至重至大、また年少血氣にまかせ世を輕く面白く渡る可からざるを知られしなり。此れより帝は冬夏の別なく朝の五時には必らず起き出で、朝の時間を勉學に供し、終日働きまた働かれたり。宰相スウァルゼンブルグの曰く、事務につきての所要とあれば、帝は何時如何なる時にも必らず余に對面し玉はざることなしと。

爾來四十有七年、墺地利の歴史も墺帝一身の遭遇も困難と恥辱と不運と群かり覆へり。即位足下匈牙利の叛亂の餘波の和らぐ可きあり。程なく伊太利佛蘭西に破られて墺地利は全く伊太利を引退けり。程なく孛露士亞との七週戰爭によつて、墺地利は全く日耳曼より引退き、墺帝は一時維也納に火をかけて國都を退去せらるゝに到れり。内外の困難失敗實に一にあらず。而して墺帝が猶此失敗の餘依然國民に仰がれ、依然强國に班するは亦奇ならずや。蓋し帝は大力量あるの人にあらずと雖ども、永く忍ぶの人なり、待つことを知るの人なり、柔靱にして彈力あるの人なり、世路の風雨に身を鍛ひて其身質堅硬骨格丈夫になられしなり。

今を距る四十一年前、帝二十四歳の秋、誕生日を祝はむとイッシュル地方に赴かれしが、當時來賓の中にバヴアリアのルイザ大公爵夫人あり、ヘレン及エリザベスの兩公主を携へられたり。帝の誕生を祝して舞踏會の催しあり、ヘレン及エリザベス兩公主も招かれけるに、妹の方のエリザベスは年もあまり少く衣裳の持ち合はせもなければと斷はられしを、皇帝はかねて其從妹の美人なる由知られければ、是非に之を招かれぬ。夜半舞踏小やみとなりて茶の饗應ありけるに、少皇帝は少公主の手をとつて卓子のほとりに寄られける。卓子の上には大きなる畵帖あり、墺地利十八州のさま

〳〵の服粧を一々畫きありたり。帝は其畫帖を翻して公主に示し居られしが、忽ち

此等は皆吾臣下なり、唯一言「諾」と云ひ玉へ、御身は余と共に盡く之を支配し玉ふ可し。

公主は無言にて其手を從兄の手中に置かれぬ。此公主エリサベス即ち今の墺地利皇后なり。其年皇帝皇后輦を共にして國中を巡幸せらるゝや、其年少美麗の風彩は墺人の心を動かし、到る處歡呼喝采の聲盛に起り、墺國人心搖動の波を平らぐるに於て一ト方ならぬ力ありき。

斯く花やかに始まりし結婚の生涯は、後に到りて少しく陰翳を見たり。花の如き皇后は、何時しか騎馬狩獵飼犬等に熱中し、朝夕馬を走らして或は輪の中を飛びぬけ或は險岸絶處に近づき、貴族の婦人には眼も呉れずして停車場の人中に曲馬場裡の女藝人と公然握手する等さま〳〵の事ありて、貴族の中には皇后の人望地に落ち、維也納の民も呆れ顔し、帝は尤も心を傷められたり。然も斯る癖も年と共に次第におさまり、今日と雖ども貴族間の人望は乏しく、且あまり人民に親しく接せられざるも、年長け世の辛酸に熟し、また曩時好んで奇を出せし皇后にあらず。皇后今や巳に遠く五十を過ぎられしも、猶歐洲諸朝廷中に美人の譽高し。皇后殊に其黄金の波の如き美しき髮を愛惜し、一絲も墜つるあれば眉を顰めらるゝこと大方ならず。故に皇后の髮を理むる侍女は一ト方ならぬ苦心をなすなり。或時侍女白銀の櫛もて皇后の髮を梳きしに、三絲兩絲の髮櫛につれて脱けたりければ、窃かにとつて之を衣兜の中に隱さんとするを、皇后目利く見て咎められければ、怜悧の侍女恐れ入つたる樣子にて、

實は妾が女にて候ふ者、是非共上樣の御髮の一絲を戴き生涯の身の守りに致し度しと朝夕念じ居候へば、恐れながら窃かに……

と申上ければ、皇后は冷笑を帶びて橫眼に侍女の顏を見られけるが、翌日見事の手箱なる指環など入れたるを賜はりて、

此は其方が女とやらに遣はす、吾髮は守りにもなるまじけれど、其方の樣な口のよく利く機轉のよく利く利口者を母に有つ女への褒美には此を遣はす。

と打笑はれしと云ふ。千八百七十九年帝后結婚二十五年の銀婚式盛に維也納に於て擧げられたり。

墺帝墺后寧ろ退隱を好まるゝより、墺國朝廷には他國の如く盛なる朝禮宴會などあまり數多からず。維也納の市民の中には未だ墺后の顏を見ざる者も少なからぬ程なり。帝は尤も勤勉の人にして、其生涯も簡易に、往々朝四時に起きて文臺に向ひ、夫れより夜の十時迄は、大小内外の所要に殆んど隙なく、一週二回は特に人民に謁見を許して訴を聽かれ、一日に百人百五十人と相語らるゝとあり。帝の好む所は日常業務の外、獵を第一とす。日又日、循々焉、持重し忍耐し注意しつゝ、帝は其位に靜かに坐せらるゝなり。

八年前王家の柱石國民の望たりし皇太子ルドルフ親王の其情婦と或深き仔細の爲めに自殺せられしより、帝后共に俄かに老ひ、其跡には皇姪フランシスフエルヂナンド親王儲貳と定まりしと雖ども、帝后共に沈默して其職分の坐に坐せらるゝと雖ども、一生の望の光りは已に消へたるものゝ如くなりぬ。歐洲諸國王家のあはれもさま〴〵なれ共、尤も悲しむ可きは療す可からざるの悲を深く心を封じて左り氣なく日常の職務に服し居らるゝ墺地利帝の白髮の姿なりけり。

科學

植物の生活（承前）

水草及び木の葉の生理

水草は凡て二種に分つを得べし。一は水面に浮び出でたると、他は深く水中に沈めるものと也。水面に浮べるは、多く丸き葉にして、水中に沈めるは、細きもの多し。かゝる葉もし地上に生ぜんには、風の攻撃に抗するとかたくして、その木は根より倒れざれば、その枝は裂け破れん。たとひ風なき静かなる空中に生活するものとなすも、かゝる種類の葉よりは小さくして、數多く、精密に集まりたるものを適當とす。故に草の中にも、外部の有様に應ぜんため灌木葉と、喬木葉との二種あり。されども丈低くして草の如き見へあるものにても、小さく刻みたる葉もあり。灌木らしきものにも、桂木、山毛欅等の喬木に似たるものもあり。草の葉と木の葉は、何によりて分るゝやと問ふに、木は獨個にて立てども、草は周圍の植物と簇生す。葉にも種々なる内、直立するものは、葱や草葉の如く細きを多しとし、横に延るものは桑の葉、柿の葉の如く廣きを多しとし、大なるものは棕梠、桐等の如く幾つにも裂けたるを常とす。寒國の木葉は大陽光線を多く受くるに適する様に作られてあり。熱帶の地方にては之と全く反對なり。故に北海道英國の如き寒國の木は、多く平たくして、その面は成べく多く太陽に向ふ様に配置せられ、之に反して熱國の木葉は、重もに直立したるかたちにて、太陽には僅かにその兩邊を晒らすのみ。又た或るものは幹その自身青くして、恰も葉の更わりを爲すものあり。箒木等の如きは是也。中には葉に厚き肉ありて、それより蒸發氣の散ずるものもあり、僊甲草等の如し。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

我國にては冬日に至たり、植物の寒氣のために生長を止むる時は、木の葉は木を辭すれども、熱國こそは四季青々として、少しも變る事なし。たとひ我國の植物を持ち行きて、轉し植うるとも、昨年迄落ちし木葉は、今年已に四季に變らざる植物となる。寒國にて木の葉の去るは、地球上の一經濟なり。もし寒國にて四季變る事なくんば、その葉は降り敷く雪を身に負ひて、もだゆる中、遂に枝を折られ、幹を曲げられ、一として生長にたゆるものなきに至るべし、故に寒國にては會々常青木ありとすれば松柏の如く、葉の細くして、雪の積らざるものに極れるは、自然の妙案と云ふべきなり。仝じ常盤木の中にても、スコッチッシ松の葉は三年つゞき、水松及びスプラウス松は、八年より十年に至り、ピンサポーは十八年の長きに耐ゆと云ふ。通常の法則に由れば、葉の短かくして圓錐形の果を結ぶものは、葉の木に止まる生命長く、葉の丈の長くなるに隨つて、反比例にその生命短縮す。最も之等は時々例外のものもありて一定せず。

熱帶地方には、動物ことに多く繁殖するが故に、若し其の植物にして通常のもの多からんには。植物は動物のために食はれて全く熱帶地方に跡を斷つべけれども、自然は能くも經濟に長けゝれば、かゝる土地には苦味あり酸味あり、香氣ある植物多くして、動物の口より免ぬかるを得るは、實に妙案と云はざるべからず。

毛

植物の毛は種々の必要あり。一つは不必要の濕氣を防せぎ、二は強よき旱乾を防せぎ、三には甚だしき光線を免かれんため、四には四足動物の口より逃れんため、五には小虫の餌とならざるため、六にはその類の植物の過度の繁殖を防せがんがためなり。

第一の場合を說明せんため、アルパイン山上のエブル

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ウヱスと云ふ植物の實こそ適當なり。是れは恰も我國の綿の實の如きものにして、木の實の表面には多數の氣孔あるにより、雨露の其の孔中に進入するを防がんがために、皮に毛ありて之を防せげり。是れがため水は內部に入るを得ずして、毛の上に玉露となりて止まる中、太陽の光線のため、風のために水氣を去られて、過度の水濕を招くを免るなり。

第二の塲合は、砂漠もしくば廣野の植物に多く見る處なり。これは急激なる太陽の熱を受けて乾燥せざるがためなり。

栗に刺あるは、其味のよきにより、妄りに動物の食物となりて、その種子を失なわざらんがためにして、之れは第四の塲合を說明するに足る。

蜂蠅等の蜜を取り去るとは、已に論ぜしも、蟻其他の小虫が、果實を食し去るとは、未だ說かざりき。その害を防がんために、毛のあるもの少々にあらず。毛なければ地上に落つると同時に、濕氣を受けて芽を出し、根を下ぐるべけれども、毛あるがために之を妨ぐる其間に、種子は腐敗するが故に、その種の繁殖過度ならざるを得べし、第六の塲合は是也。

土地と物植の關係

植物の性質は土地の如何に關すると甚だしきが、中にも、花崗石質と、石灰質との土地は、最も反對の結果を顯わせり。地楡と云ふ草あり、同じ種類の中に二た色ありけるが、今もし同時に種子を下す時は、甲種は石灰質を好みて活き〱として長く生育すべけれども、乙種は石灰質をきらひて、だん〱小さくなり、遂に消へ失するに至る。之に反して乙種は花崗石質の土質には青々と延び上り、美しき花を開けども、甲種は不幸なる最後を遂ぐるに至る。かゝる事實は多く證せらるゝ中にも、ロードデンツロンと云ふ草の如きは、甲種の發育する花崗石の土地には、乙種は生育せ

ざるを見る。かく種々なる面白き關係を有するが故に、植物學者は、夏時散歩の邊にも、數百の植物を集めて、此の小說らしき樂しみ、もしくは古人の慰を實地に味いて喜ぶなり。

下種に付きて

種子を植ゆる事に付きては、實に不思議にして面白き結果を見るを得べし。刺鷹爪の如きは、原と一本の親木より取りし種子を植へ、又その種子を取りて植ゆる內、末に至れば、至る程、漸々その葉の刺の減ずるを見る。之に反して、ゼテツトと云ふ草は、種子を取りて植れば、植うる程、刺を增すに至るとは、いかに奇妙ならずや。

植物の睡眠

植物は動物と全じ習慣を持てり。多くの植物は雨の降る時、その花瓣を閉づ。これ雨水のため、花粉と蜜を奪ひ去られざらんがためなり。雨天の時は去るとながら、美じき天氣の時にても、數時間の間、花瓣を閉づるものあり。何が故にかゝる習慣はあるやと云ふに、動物によりて我等は更らに能く之を解說するを得べし。動物は疲勞する時は睡眠す。是れ通常の規則なり。されど何故に花は睡るや、何故に或る花は睡りて、或る花は睡らざるや、殊とに一種の花は長く睡り、或る花は少しく睡るやと云ふとは、一つの問題ならん。蓮は日出に開きて、日沒に閉花し、夕顏は夕方開きて、夜中に閉花し、芍藥も牡丹も、各々開花と閉花の時間を異にす。蒲公英は七時頃に開き、五時頃に閉ぢ、其他花の種類によりて開花と閉花の時間を異にす。我等はかゝる妙工を見て、造化の全智を感ぜずんばあらず。凡ての花を細密に觀察する時は、その開閉の理由を審かにするを得べし。夜閉づる花は、大概虫によりて花粉を紹介さるゝ花にして、風によりて花粉を送る花は、決して開閉せず。風によりて花粉を送る花の開閉せざ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

るは、風には晝夜の區別なきが故にして、虫にて送らるゝ花の開閉するは、虫に夜中來る虫と、晝の虫との二類ありて、花は己がため不利益なる虫の來る時間を計りて、閉ぢ、利益ある虫の來るべき時間を知るが故に、開きて待つなり。その證據として、ヘスペリス、マツロナリス或はリクニスベス、ボルチナ等の如き草は、夜間のみ好き香を放ちて、虫を呼び寄せ、外の時は何の香もなきものあり。獨り花のみならず、葉にも、亦開閉するものなり。ダルヴ井ン氏之を説明して、葉の閉づるは蒸發氣の蒸散するを防ぎて、寒氣を受けざる樣に己を保護するなりと云へり。

雨と葉の關係

雨と植物の關係は更らに面白きものあり。日耳曼蛇桑形草は、堅固なる二た列の刺あり。鷲鳥棻は一並の刺ありて、降りたる雨の葉にかゝる時は、その刺は溝の役目を爲して、之を根に導ける。大根蕪の如き上に向きたる葉のあるものも、亦た同じ目的なり。此種類は根に水を要すること多きがため也。之に反して根の廣がりたる植物の葉は、外に垂れて雨を四圍の根に灑ぐ。是れ此種類は根に水を要せざる種類なれば也。又た或る者は雨を葉の中に溜むるものあり。『淑女の外套』と稱する草は、小さきコツプの如き樣の葉ありて、その中に美しき光りたる水を貯わへ。ケルチルと云ふ草は、羊や家畜が食物に爲すんと、葉に口を付くる時、かねて葉上に蓄たる水の冷めたさに、驚きて逃ぐると云ふ、

物眞似(ミ、クライ)

弱き植物が、強き植物に似せて、己れを安全に保護するとあり。加密利は苦がき草に動物も之を食ふを好まざるものなるが、マツリカリヤ加密利は、己を安全にせんために、その形を眞の加密利に似せて、動物の口より逃れんとす。スチンギング草と蕁草の似たるが如

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

きも、手近かき一例なるが、スチンキング草と毒草とは、大凡共に生じて、その形も亦た甚だ能く似たるを以て、屡々欺かるゝ事あり。或る果物の枝などは、虫の形に能く似せて、已を保護するもありと云ふ。

蟻と植物

小虫の植物に於ける關係は、たゞ花粉を運送するのみならずして、種々の有益なる功用あり。例へば蟻の如きは一分時に二十八匹の害虫を殺して巣に運ぶが故に、木の益する處は、少なき事にあらず。之れより五月雨の頃となれば、多くの害虫は木の新芽に附着して木を害せんとする時に當りて、忠義なる蟻は、力を盡して之を征伐して、己が食物となすの傍ら、木を保護すると厚し。

羽虫を食する植物

上に書せる處によれば、植物と動物との關係は、互ひに等しけれども、或る場合によりては、植物のみ益を受くる事あり。北亜米利加の蠅取草の如きは、奇中の最も奇なるものなり。此草は鼠取の如き仕方になりて、蓋は蝶挾にて開閉し、身のふちには甚だしき刺ありて、表面は凡て感覺鋭るどき毛を以て覆はれたるが、羽虫一度過て此の蓋に觸るゝ時は、蓋は急に閉ぢて虫を捕ふ。此時中よりはねば〳〵としたる液出で、虫の身を溶かし、滋養物を悉とく吸ひ取りて止む。サンヂウ草、バターニ、ボラスプレ、ドルウオルト等も肉食植物なり。

植物の運動

植生の生涯を觀察するに方りて、我等は高等植物の事を見ると共に、又た下等植物の事を知らざるべからず。勿論動物と植物とは、一見して判然たるが如くなれども、その下等なるものに至りては、殆ど相わからざるものあり。一種の海藻あり、之れは全身悉とく細胞を以て造られたるが、不慣れの人の見る時は、一見して

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

動物と思ふと稱なる事にあらず。躰の表面にはシリアと稱する震動する毛ありて、之を以て水中を自由に遊泳す。且つ眼の如き赤き點ありて、光線を感ずるとを得。之がために適當の場所を見出して吸ひ付くなり。

昔しは植物には運動の力のなきものなりと云ひけるが、こは甚だしき誤解にして、蔓を卷く植物より、夜中眠むる植物等を、一々しらぶるに決して動くの性質なしと云ふを得べからず。通常の雛菊が、一定の時間に開き、一定の時間に眠りたる樣は已に此等の人々には珍らしかるべけれども之よりも珍らしき事あり歐洲諸國の川に多しと聞こゆるパリスチリヤ螺旋花と稱する草は、實に奇怪なる運動を爲す。此草の雌花には螺旋形の莖あり。雄花にはなくして、各々水中を別々に遊泳せるが、泳ぐ中に二個はいつしか一個に附着して、表面に浮み出でゝ、又も泳ぐ中に、雌花は種子を結び、やがて雌花の莖は、水底に下りて、安全に種子を地中に出産す。

また眠り草等と云ふ、草は殆ど生きたるかと疑ふ迄に、物の觸るゝを能く知りて、忽ち葉を萎む。

奇態極まれりとも云ふべきは、シクソミセツと稱する草なるが、砂糖にて煮付けたる果物を固めたる如きものにして、通常濕氣あり、枯れ葉等の多くある地に生ず。常に定めたる住居なきが如く、濕氣、光線、暖氣を追ひて轉々す。若し試に躰の一部に彼の好むものを近づくる時は其部の動き出すと共に全躰動き出すべし。又た再び鹽の溶解せしものと炭化ポッタース若しくは硝石、等を其傍に放てばその躰自然に逃ぐるが如く之に遠ざかり砂糖或は櫟皮末を注入する時はその滋養物を吸入せんとして身を滋養物の傍に近よする也。また寒き時は、彼等は地の下に下ると雖も、果を結ばんとする時は、地上に昇りて寒氣を恐れず。時に五六尺の地中を上下するとあり。恐るべくもいやらし

き植物なりと云ふべし。

植物の種類

植物の種類は五十萬と概算せらるれども、其中に我等の明解すべからざるもの、一にして足らず。我等が自國の中にて、新らしき植物を發見するとなしと假定するとも、倘ほ人跡稀れなる土地の植物は、その半も説明しあらざるなり。殊に苔に付きて、我等の智識は未だ至らざる所多し。

文藝

乳母の歌

ブレーク作

殘月樓主人譯

芝生に子らのこゑきこえ
小山のかたにわらふこゑ
響くをきゝしとき〴〵は
こゝろおちゐて何ごとも
思ふことこそなかりけれ

『日も入はてゝゆふつゆも
おきそめにけり吾子達よ
あそびをやめていざ家に
明日の朝日ののぼるまで』

『かへるはいやよ今しばし
あそびてゆかんまだ晝よ
寢んにはいまだ早ければ
あれまだ空にとりぞとぶ
小山にひつじの遊べるは』

『さらば和子達あそびてん

くらくなりなば大人しく
家にかへりてねぶりませ』
幼なき子らはとびたちて
わらふこゑ〴〵いと高く
小山にひゞききこえけり

黄金事蹟

湖処子

名けて黄金事蹟と云ふものは、其事蹟の稀有にして、其價値の世界に値する所の金玉を以てするも、猶ほ量るべからざるものあればなり。余は今幸に其二三を耳にするとを得たれば、餘白を借りて之を記錄せん。家庭の益たるを得ば幸甚し。

（一）饑渴の水

昔和蘭王國が、英國の後援を得て、スペインの專制君主に對して、自由の義旗を擧げつる時、英軍中に、サー、ヒリップ、シドニーと呼ぶ士官ありき。ある處の決戰に、苦戰して創を蒙れ、出血の爲め饑渴を覺ゆること甚だしかりしかば、渠は傍人を呼ひて水を求めぬ。

水來れり。渠は其鍾を擧げて唇につけんとして、不圖傍に仆れて、死に瀕せる一兵卒の、羨ましげに其甘冽なる飲料を凝視するを見き。渠は其の一滴をも喉を下さず、鍾を他か唇に推して曰く。御身の水を要すること我より急なりと、兵卒をして飲み盡くさしめぬ。

（二）自由の爲に道を啓く

是は有名なる瑞西の雄、井ンケルリードのアルノルドの事蹟なり。昔年ゼルマンの皇帝、溪壑の欲を肆にし、土地を奪ふの目的を以て、瑞西に攻入りたる事ありき、其時敵は人ごとに長槍を執り、密に列ふと鉄

壁の如くして立ちたりければ、短兵と斧鉞の外に打ものなかりし瑞西軍は、進まんとして進むと能はず、兵氣漸く沮喪せんとす。

此時一人衆を排して出るものありき。其人はアルノルドなりき。渠は顧みて其軍に辭して曰く、國人よ、我妻子を卿等に托す。我往て道を啓かんと。語畢り、胸を披きて敵に投じ、敵の鎗先十餘本を懷き、身を以て之を壓伏し、

自由のために道を啓かむと叫びし渠は、
自由のために道をひらきて斃れたり。

瑞西全軍は、一齊に渠が死骸を越て進み、日の暮るゝ頃、大に敵の軍を破り、自由萬歲、瑞西萬歲の聲、曉に徹して止まず、語井ンケリーの事に及べば皆一軍泣く。

（三）三人志を合すれば其利金を斷つ。

二千年前、シラキユースに二人の友垣あり、一をデーモンと呼び、一をピシアスと云ひ、共に時の名士なりけり。當時國王虐政を擅にし、人民生を聊ます、怨咨の聲到る所聞えしかば、人邑の義民等、窃かに謀りて反逆を企てしに不幸にも、未だ發せずして事顯はれ、領袖の義民は皆捕はれて死に處せられぬ。

デーモンも亦主領の一人なりき。渠はシラキユースより遠からざる村落の人なりしかば、死するに先つ數日、王に請ふに、家族に訣別するの暇を以てし、必ず歸期を誤らざらんとを矢ふ。王は渠を信ぜずして曰く、汝に代つて牢に質たり。汝期に後れん時、汝に代つて死するものあるにあらずんば不可なりと。心窃に謂へらく、斯る人質あるべからずと。

デーモンは命を承つて退き、ピシアスを呼びて事情を告げ、家族に訣別する間、暫く代つて質たらんとを請ひしに、ピシアス慨然として之を諾し、寧ろ代つて死せんと欲するの意なり、テモンに從つて王の廷前に

に赴きぬ、王は事の意外なるに、呆然として暫くはもの言はざりき。渠は心之を許さゝらんと思ひしかとも、駟も舌に及ばず、前言を取消すと能はざりしかば、餘儀なくピシアスを留めて、デーモンをば放ち還しぬ。』日來り、日過ぎ、處刑の日既に時を以て數ふるに至りて、デーモン歸り來ざりしかば、王はピシアスの動靜を察むと、牢を訪ひてピシアスを見、其の意外に平然たるを見て、心竊かに之を怪み、ピシアスに問ふて曰く、デーモンは既に去れり、復た還り來べからず。ピシアス徐ろに答て曰く、王誤れり。デーモンは信なき人ならず。若し行路の難なくんば、渠は既に久しく茲に在らんものなり。渠が後れしは海上風波の沮むに由るのみ。渠來らずんば我死ん。我死するは、渠の死するに勝る。渠には最愛の妻子あるも、我には即ち之なければなり。我は寧ろ我が頭の落つるまで、渠が淹留されんとを禱りて止まずと。

悲慘なる日は遂に來れり。然してデーモンは猶は未だ歸り來ざるなり。デーモン來らざりければ、ピシヤス死すると定まり曳かれて斷頭臺に上れり。渠は王に向ひて云へり。我禱聞かれぬ、我今日我が友の爲に死ん、然れども、王之が爲にデーモンが信なるを疑ふ勿れ、王はやがて渠が今日此處に在らむ爲め、今如何に苦心しつゝあるかを知り玉ふべしと。デーモンが健馬に鞭ち、斷頭臺下に馳けつけたるは、間髪を容れざるこの一瞬間なりき。渠は馬上より臺上に飛び上り、ピシアスを懷抱して「神に謝す我が友よ、誤つて君を殺さゝらんが爲めに、余が如何ばかり痛心せしかを思へと云へり。

王は遙かに此躰を見て。痛く感動し、命じて二人を臺上より下らしめ、二人をして終身其友誼を全ふせしめぬ。嗟呼是は二千年前の事と雖、二千年後の今日猶は活きて人心を動かすなり。

（四）國家のため二個の命なきを悲む

米國の青史に於て、ナサン、ホールの姓名の如く、赫々たる姓名スイとかや。是は米國獨立戰爭の際、ワシントンの配下に屬する少年士官なりき。一千七百七十六年、ワシントンはロング島まで軍を退くるの際、正に英兵の强弱、動靜を知らざるべからざる必要に逼られ、其任に堪ふるものを擇びし時、ナサン、ホールは謂へらく、此の大任を全うして元帥を助くるは、我が國家に盡すの本分なりと。渠は斷乎として心を決し、此の危ふき使命に當らんとを請へり。斯くて渠は巧みに其服裝を變へ、運よくロング島に入りこみ、盡く敵の城壘を圖し、盡く英兵の爲んと欲する所を搜りて、備さに其使命を具し、米軍に投せんと欲して誤つて英兵の拂ふる所となり、將軍ホーウの前に曳かれ、間者として宣告せられぬ。

然れども渠は間者にあらざりき。間者とは金錢を受けて、敵の秘密を發くものにして、國家の爲に本分を盡す、渠が如きは、決して間者にあらざりしなり。

英將ホーウは、とを待つと宛も盜賊を待つが如く、刑するに臨むで、僧をも延かず、聖書を與ふることすら許さゞりき。然れども渠が崇高なる精神は、終に臨むで、激昂し、「我は國家の爲に二個の命なきを悲しむ」と云ふ悲壯の辭世を貽して斃れぬ。渠が永く其國民に歌はるゝも宜ならずや。

（五）

少女グレイス、ダアリングは、英國のある海岸に立てる燈臺守の娘なりき。一夜風烈しく霧起り、燈臺全く見えざりし時、不運にも、沖を航する舟ありき。風は愈激しくして舟の窓を吹開き、浪は甲板を打ち越え來つて火を消し、器械の運轉は爲に止まり、風浪に任せつゝ。二度三度搖られたる後、忽ち岩礁にうちあてければ、船躰聲を揚げて一時に龜裂し、一寸一寸水を呑

むで沈落し初めぬ。中に九人の乘客あり辛うして甲板に上り。波を浴ひる欄干にとりつき、九死に一生を冀へり。岸までは僅かに半里に足らざれど、霧深くして燈臺を辨ぜず、天明けてくるに隨ひ望の光愈暗くなりぬ。

夜もすがら海上の安全を祈り居りし少女、曉をも待たずして起き、難破の船もやあると、望遠鏡を以て海上を眺めたるに、果せる哉ほの〴〵明るき霧の中にあはれなる破船の見えければ、躍り立ちて父の寢室に駈けゆき、「父よ父よ、疾く夫の憐れなる人々を救ひ玉へ」と、叫ぶに、父も起出で破船を見たるが、「このあれにては、とても助かるべくもあらず、氣の毒なる人たちよ」と、少女の思ふにも似ず、いと冷かに答へければ、左らばとて少女は獨り岸に下りて、小舟に飛のり、さゝ波の外櫓を操りたることなき弱腕を以て、この荒波に向ひければ、冷淡なる父も、痛くも我子の義氣に動かされ、自ら少女の櫓を執つて沖に漕ぎ出づ木の葉の如き小舟山の如き高浪の上にあがりては落ち、あがりては落ち、一浪ごとに難船に近づき九個の生命一個たに失はしずして載せ歸りぬ。

グレイスデアリンクに幸あれ、彼は九人の生命の親なれば。

もしほ艸

其一、竹の雫

柳澤淇園、胸懷洒落にして光風霽月の如し。其短文詞は藹として潤玉の如く、春風餘韻あり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

所　帶　の　箴

天下は一人の天下にあらず、萬民持合の天下なり。身帶は一人の身帶にあらず、家内持合の身帶なり。了俊

は獨味を制し、正成は二葉を戒む。

拂子の贊

遊ばんことをほつす。遊びて足らず。樂まんことをほつす。樂みて足らず。僞らんことをほつす。僞りて足らず。貪らんことをほつす。貪りて足らず。終に盜まんことをほつす。

男女打まぢりて酒たうべ花を見るに、傘さしたる繪に、

おもしろの世の中や、恩を忘れぬほどあそべ」。おもしろの春雨や、花のちらぬほどふれ」。おもしろの酒もりや、こゝろのみだれぬほど斟め。

修業の詞

花は雨の過ぐるにまかせて、紅ます／＼色をそへ、柳は風にもまるゝに隨ひて綠いよ／＼ふかし。

紅葉の詞

人と契らば、うすくちぎりて末とげよ。もみぢ葉を見よ。薄きはおそく、濃きはとくちるものにて候。

其二、芭蕉葉の露

松尾芭蕉、秋葉風無ふして一秋を減ずる如し。

＊＊＊＊＊＊＊

坐右銘

人の短をいふ事なかれ。己が長をたのむ事なかれ。

ものいへば唇寒し秋の風。

其三、白河の關の戸ざし

流石は江戸三百年の賢相として、既に覆らんと欲したる徳川氏の大厦を支へ、以て再び寛政の盛觀を呈さしめたるだけあるかな。白河樂翁公の坐右の銘、中に女の才を以てあるもなきにおとるなどいひし漢學者流の通弊を承けて固陋の所なきにあらざれども、謹格の中に文雅を寄せ、其文辭も蓋し得易からざるなり。

＊＊＊＊＊＊＊

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

坐右銘

表

寧靜是養心第一法　謹謙是保身第一法
讀書是廣智第一法　勤儉是治世第一法
含容是待人第一法　愼交是遠害第一法
安祥是應事第一法　知足是享樂第一法
存厚是召福第一法　寡慾是延壽第一法

裡

夜更けてことゝふとも、初時鳥、雁かねは、必ずうとくすべからず。

枕に通ふともとがなきものは、花の香、遠寺の鐘、霜夜の虫の音はことにあはれむべし。

にくゝともゆるすべきは、花の風、月の雲、うちつけにあらそう人はゆるすのみかは。

野分の朝の庭の面ならで、亂るゝとゆるすはあらざるべし。落花落葉の狼藉はゆるすのみかは。酒のみだれは其類いならず。

月はいつとても親むべし。されど過しをしたふも苦し。行末を思ふもうるさし。只むかひてこそ。腰のあたりにていかづち鳴出侍らずば、共にぬともありなん。花の下臥もおなじ。

あるもなきにおとるは、誠なき人の才、女のさえ、いなつまかげ、あふと見し夢。

うたてきものは、みな月の鶯、落葉の風にさはぎたる。

おほきといむものは、茶器、酒のさかな、遅さくら、りうたんの花、ほとゝぎす、すゝむし。

よきはよくあしきはあしきは、うたひもの、やめる女、風流も其うちなるべし。我が程を知り、なすべき事をなしてこそいはめ。しひて古を好み、月花をめづるとていかでいはん。よすがら月見んよりは、日を惜むにしかじ。

思ふにたがうて嬉しきは、八月十五日のはれたる、五月雨の雲間の月、幼きとおもふが文つくり歌よみたる。

うとむべきものは、難きいふもの、よそ見めりくつ、午祭のつゝみのおと、蜘蛛のゐ、あしだのあと、すゝめ、ねこ、鼠はなほにくむべし。打もころしつべくおもふは、蠅、蚊、ひるいづるはことにこそ。

尊むべきは、人にことなる人、尙うとむまじきは、ひとに異るさまの人。

きゆるときをゆるして雪を見、雫の月を思ひて夕立にあふべし。

梅が香を櫻の花柳の枝になどとはおもふまじき事なり、花の紅、柳のみどり、心をわけてたのしむべし。

たれりとおもふべきは、わがみ。たらずとしてよきものは、つとむべき道。

樂しきとおもふが樂しき本なり、いかで外にもとむべきと、樂む翁いふとぞ。

一休の母

王侯貴人を爪垢とも思はず、釋伽達磨をも土塊の如くに見なし、豁然大悟して、一世を放遊し去りたる大和尙一休としいへば、誰も其大智識なるを知らざるはあらざらん。誰も其傲然として身をも世をも何の緣爪と看過ごしたるを知らざるはあらざらん。

去れども彼が此くの如きに至りたる所以は、全く其母の力にして、彼女は深く佛理に通じ、識高く意雄々しくて、彼をこの釋迦達磨をも奴としつべき意氣ある人となしたりしに最も適當せし母なりしことを知るものは稀なり。

彼女が身まからんとしたりし時、其子千菊丸とて後に

僧一休となりし彼に遺しゝ書に、斯くものしぬ。

我等娑婆の縁盡き、無爲の都(死)に赴き候。出家に成り玉ひ、佛性の見を磨き、其眼より我等地獄に落るか落ちざるか、不斷添ふか添はざるかを見玉ふ可し。釋迦達磨をも奴となし玉ふ程の人に成り玉ひ候はゞ、俗にても苦しからず候。佛四十餘年說法し玉ひ、ついに一字不說と宣ひし上は、我れと見、我と悟るが肝要に候。何事も莫二妄想一。あなかしこ。

九月上旬　（不生不死身

千菊丸どのへ

かへすがへすも、方便のせつをのみ守の人はくそ虫と同じに候。八萬の諸聖教をよみても、佛生の見をみがゝずんば、此文ほどの事も解しがたかるべし。

これとてもてかりそめならぬ、わかれては
かたみとも見よ水くきの跡。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

筆を下して、まづ佛性の見を磨き其眼を以て我が墮落地獄不墮落地獄常住隨常住不隨を看よといふ、已に垂誡の異常なるを見るべし。說て釋迦達磨をも奴としつべき人とならば僧たらざるも不可なしといひ、釋迦四十年の說法も遂に一字不說といひたりしと告げ、且つ徒に小乘的方便にのみ拘泥するものはくそ虫の如しと罵りつゝ、又如何に多讀するも大悟見性するにあらずんば此の文をも解すること能はざるべしと揚言したりし如き、彼女が已に自ら釋迦達磨をも奴とせんず意氣ありたるを察すべし。自ら稱して不老不死の身といひし類、決して凡俗の見にあらず。而して其の誡勅の勵至にして鼓舞の峻激なる、寔に滔々たる丈夫を耻ぢしめんとするなり。此毋にして此子あるは固に異むに足らざるのみ。

然れども紙尾の一歌に、此の筆の跡を見て、我が紀念

とちせよといふに至ては、流石婦人の本性をあらはし、鐵石の如き壯言烈語も、蓋し限りなき慈愛の淵より湧き盡き難き涙の底より出でたる痛辭なるを知るべし。

繪畫

畫學の栞（七）

金仙

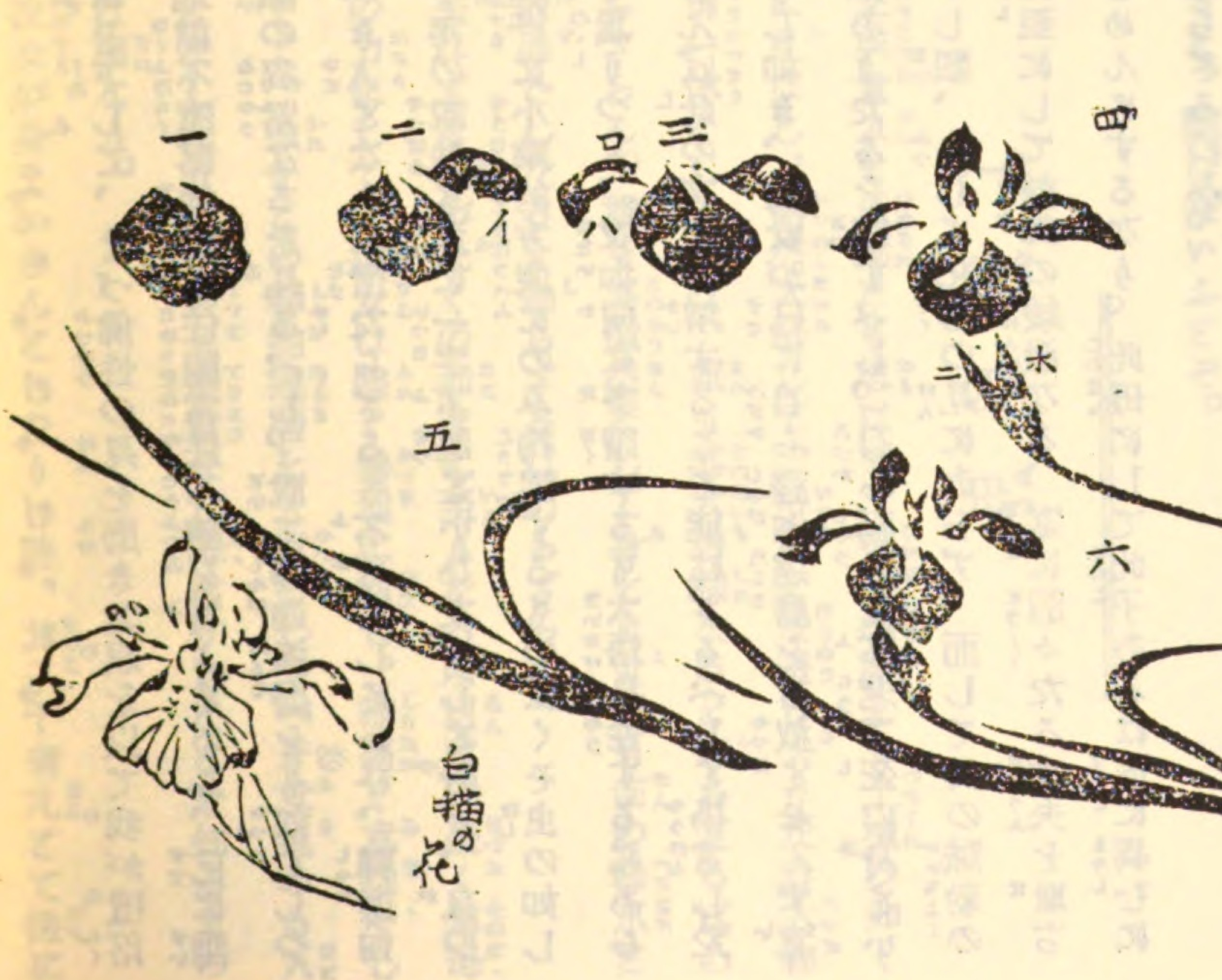
菖蒲花

左の順序によりて習ふ可し、

（一）花より始むる先づ筆を横に使ふて二筆にて畫く、其中最もすきを造りてよし、

（二）も花瓣一筆によりて畫く、筆の先きに筆力を加へ、其餘りの筆にて即ち（イ）に行く、

（三）同じく花瓣、一筆にてよし、先きに（ロ）を書き下の筆（ハ）につゞく、元と菖蒲の花は三瓣のもの故其心して



習ふべし、

（四）花の心三筆、點を打つ、後花の莖をつけるなり、莖は（ニ）筆を輕く先きにし（ホ）を後にして其餘りを長く引く可し、

先づ花を畫き置きて、

（五）葉を畫く、葉は只一筆一筆づゝ上より下へ引べし、大躰三葉にてもよし然れども何れも直なる葉にては何の面白味もなし、即ち位置を取る爲めに一葉は折れる形にす、順序は前なるものを先きにし、後をあとにす、而して折れたるものを最後に、

（六）圖は其完了のもの、

因に、花の白描法を見よ、墨色加減は花濃く（之れは總て深藍色のもの多き故殊更花は濃くす、）葉は前のものを濃くし、他は皆淡にす、最も濃墨に葉に隨ふて其中に一線のしべを入る、

無聲詩話（十五）

探幽常信の頃に當りて、別に一派の旗幟を飜へして一方に雄視したりし緖方光琳ありき。

名は方祝、字は道崇、寂明と號し、青々堂、長江軒ともいひぬ。平安の人なり。

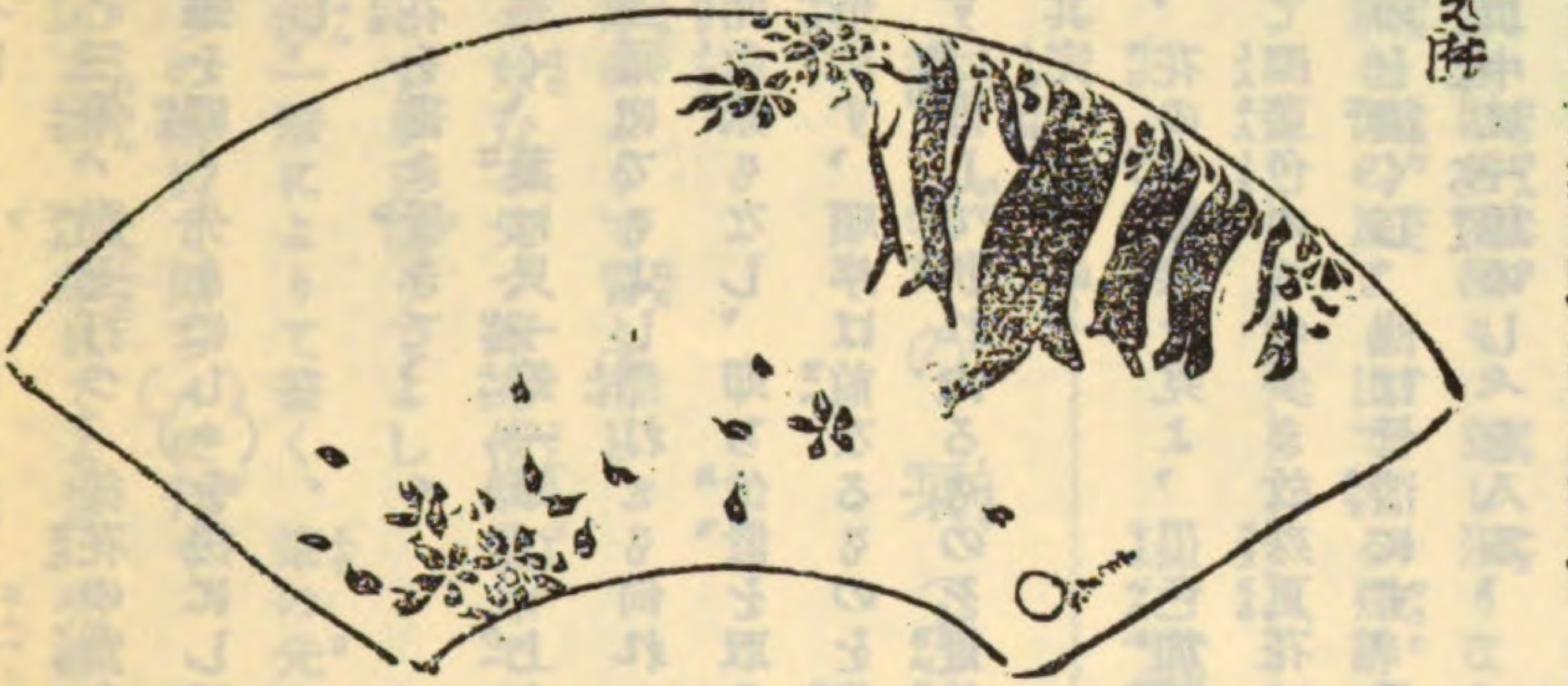
彼は初め狩野常信を師とし、後伊年に學びしが、天禀の彩筆ありて遂に一格を創せり。性豪肆にして畫も亦超群。意匠嶄新にして自ら天至の所あり。最も設色に妙あり。

後世工藝家は皆摸範を彼に取り豐潤富艶粲々たり輝々たり。渡邊始興抱一上人等其畫風を喜べり。享保中に沒す。

又彼が弟に乾山なるものあり。巧に陶器を作り、所謂乾山燒を出したり。亦畫をも能くしぬ。光琳も屢畫を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

彼に與へて其業を助けしといふ。



光琳

斯くの如く時に卓絶の畫人を出すことなきにはあらざりしも、江戸の上半時代は幕府の御用繪師としては狩野氏あり、朝廷の御用繪師としては土佐氏ありて、殆ど土佐派にあらず、狩野派にあらざれば、畫家にして畫家にあらざる如き勢を呈したりしなり。

去る程に昇平日久しくして天下皆人生に深き趣味を有するに至り、始めて平民的の人生畫としては浮世繪なるもの興り、貴族的(筆意よりいふ)の寫實畫としては圓山應擧ありて出でぬ。

家政

十六七の娘

さなきだに蝶よ花よと愛づる娘の、十六七の花盛と呼ばるゝ年齡に達しては、親の愛も一しほ深からん。されど心せよ、十六七は婦人一生中の、最も大切なる一時期にして、身心共に、父母の注意を要するの時たるなり。

婦人十六七の年に至れば、神系最も鋭敏になりて、容

易に外界のことに感じ、人の愛情も、深切も、不深切も、凡ての事、そのまゝに心に入りて、全身を動すべければ、もしその時に當りて、良き種子蒔かざれば、收獲

の時に後悔するに至るべし。

この時代の娘を、最もよく感化し得るは、母の深愛に如くものはあらず。眞實の愛を以て、深くその娘の心を奪ひ、娘をして全くその母を信用せしめ、愛せしめ、同情を表せしめて、何事を爲すにも、母の命を喜んで守り『母を慰めんと、是れ娘の慰』と云ふ程に至れば、感化も思ふまゝに行きとゞくべし。かくなすには、勿論、時と、場合と、性質と、家風とによりて、種々の法方もあるべけれども、何れの國、如何なる所に於ても、母が娘の云ふことは、丁寧に聞き取りて、世話しき時、つまらぬ事を語りたりとも、忍耐して之を聞き、又た娘の不審なることは、好く解かる迄、深切に説明して、母の云ふ處は、娘之を喜んで、又た信じて、之を聞かしむる時は、大概の場合には娘の心を得べし。愉快にして、面白き空氣を作るは、母の作る美術品の中にても、最も價値あり、最も美麗なるものなり。然るに母が一家の不快の源となり、母の顔を見るときは、胸塞さぎ、心もち悪しくなる如きとありては、恐るべき弊害は、之より隨がひて生ぜん。面白き笑ひ聲

を以て話し合へる娘の聲の、母の足音と共に、ハタと止まり、或は光るが如き美しき顏色の、母の前に出づる時は、薄雲に覆われしが如き樣となる如きは、何れも母に惡しき處あるにあらざれば、娘に面白からぬ事情ありと知りて、殊と更らに注意して、矯正を計るべし。眞に子供を愛し、眞に子供に愛せらるゝ母は、遊ぶ時も、食ふ時も、出づる時も、語る時も、母と子供は、共に居らざれば、反て不愉快をこそ感ずれ、母の來るを忌みて、母の前に顏をひそむるが如きとはあらざるべし。

さればとて娘に甘ま過ぐるは、恐るべき弊害の原なり。さなきだに婦人は男子よりはあまへ勝ちの性質を有するが故に、その性質を發達するまゝに任かする時は、學生となりては、敎師の命にも從たがわず。人に嫁しては、姑にさかひ、夫にも仕かふると能はざる、所謂氣隨者となるべし。娘を愛すると云ふ時は、娘を尊とび、敬まひ、娘の爲すと云ふ事は、決してさからわず、已れは朝早くより起きて、家事萬端に心を配ばるも、娘は遲く迄眠らしむると云ふが如き事を云にあらず。飽く迄も、叱るべきは叱り、敎ふべきは敎へて、母の威嚴を保もち、一方に娘の忌まぬ樣に愛を心の底に刻むべし。

母は天地の間にある、凡ての善き事を、娘に通辯する役目なるとを忘れず。事に付き、物に付き、之を娘に敎ふべし。眞正の喜樂を一家の内に招かんと欲すれば、先づ一家の人々を化して、善人となさしむるにあり。善の集る處には、不快、不義、不善は自ら避くべし。中にも遠き學校に娘を送りて、學ばしむる母達は、一年一度の休暇を以て、歸宅する時は、滿腔の精神を鼓して、之を娘につぎ込むべし。娘一生の性質は、九ケ月學校に在る間よりも、三ケ月家に歸りし間に作るを得べきなり。學校に在る娘は去るとながら、家にあり

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て教育する娘は、鬱憂病を起すの恐れなからしむるため、勉めて屋外的遊戯を與ふべし。或は草花を摘むの遊び、或は親たしき友人を訪はしめ、若しくは時々は買ひ物に伴なふ等、然るべき慰みを與ふべし。縫ひものは一の手藝として、勉強せしむべきは勿論なれども、娘は綿密なる性質のあるものから、その手藝を以て一の慰として樂しむを得べければ、家政の度のゆるす迄の範圍内の自由を與へ、或は小さき切を與へて、細工ものを作らしめ、或は小さき切を集めて、坐敷の裝飾品を作らしむる等は、一擧兩得の慰と云ふべし。又た良き小説は勿論、善良なる傳記、清潔なる新聞を讀む事を免るして、時事をも知らしむべし。

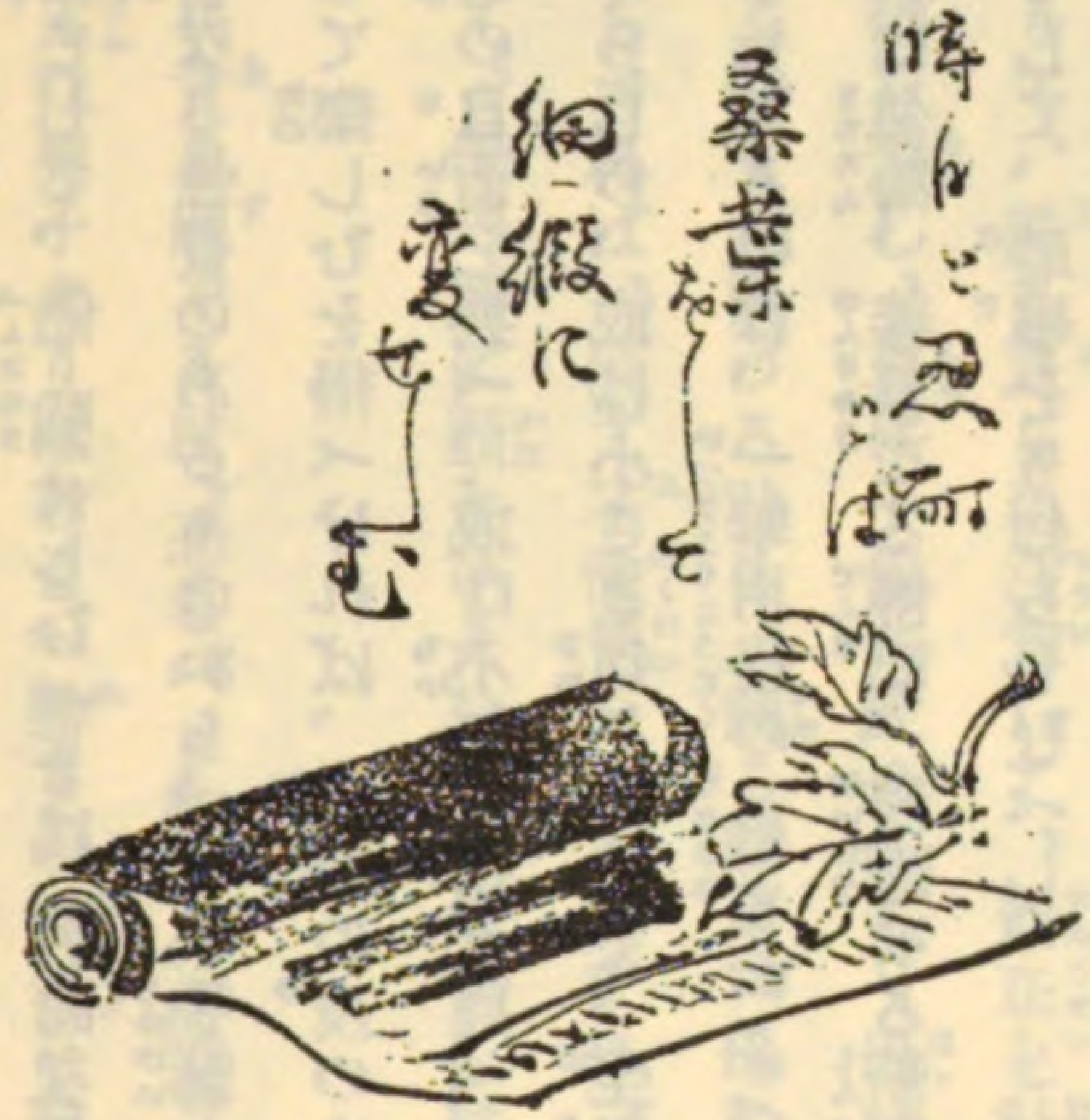
母の勸めのむつかしゝとは、是れを云ふとなれども、男子よりは、娘には格別威厳を保ちて、母を恐れしむるの分子と、母を愛し心より愛さしむるの分子と、程を好く調和して服用せしむべし。

以上多くは、心に關せる事なれども、婦人一生の病の源ともなり、健康の源ともなるべき、月經も此の年頃より始まるべければ、母たるものは、親切にその注意法等を教へ、亂りにその間散歩し、或は入浴する等の事なき樣に、しみ〴〵と教ふべし。十六七才は已に婦人一生の、最も大切なる頃なり。ゆめ〳〵教育養育を怠るべからず。

時間

昔しより光陰は矢の如し、古は白駒の隙を過るが如しなどゝ云ひて、時間の空しふすべからざるは幾千の學者が、幾度か口を開く毎に操り返し〳〵て語れる處なれども、さて之を失なわずして、しかも有益に用ひんとするは、中々に難き業なり。貧賤より身を起して高貴の生涯を送れる人々の履歴を聞く毎に、心を動すは

彼等が小さき一物をも、最も注意して、最も大切に用ひしことにぞある。決して初めより高貴なる位地のありしにはあらざるなり。こは我等が日々起き出づる時に感ずる事にして數〻、けふの一日は有益に、又た節慾して過ごさんと決心は爲せども、夕方に至りて觀れば、悲しき一日となると、一年を通して然らざるは稀なり。



光陰を大切に用ゆるとは、隨分むつかしき事なれども、そのむつかしき事は、少年より學ばざるを得ざる一の義務にして、之を適當に用ゆると否とによりて、起る處の差の著るしきは、殆ど驚くに堪へたり。

有名なるチヤタム侯ピットが些かの時間を用ひて、夥多の事業を爲せし事は、通常時間を倹約せりと云わるゝ人々さへも、驚ける處なり。彼は公務としては政事上の運動、外國政府へ對しての政略に至る迄、殘らず關係を有しながら、一方には小さき事に注意の行とゞきし事は、或る佛國より上陸せる旅人に怪しげなる者ありしに心をそゝぎて、その人の寫眞を寫して、常にその擧動に注目せりと云ふ一事を見てもその細心なるに驚くべき也。誰しもかくあらまほし。殊に記臆すべきは、人類は短じかき一生の間に、極りもなき多くの事を爲さゞるべからざれば、時間を倹約して、無益の事に費すべからずと云ふ事也。此れを爲すには、毎朝床を出でざる前に、一日の仕事を考へ、その考へに隨

つて順次に事業を取り、再び眠る迄には、企てたる事業は、全く終ゆるを勉むべし。かくすれば日中の大切の時間を、空想に終らしむるの憂へなく、腦髓を徒らに疲らすの恐れなくして、夜に至りて一日を廻顧するに及びて、心よき事如何ならん。

この廻顧の習慣を養はしめ、己の主義を深く吹き込まんとて、インドの或る理學者は、その書生を教育するに當つて、一の法則を行なへり。之れは已に古くよりあり來りし法なるが、毎日夕食の時に弟子等の集會せるを折とし、教師は一人毎に問ひて今日一日中に何をなせしやと問ふ。彼等の或る者は喧嘩の中裁を爲せりと云ひ、或る者は父母の命を行なひしと云ふ、中には何も新らしき事業を爲さず、或は友人より金を貸れり等の返事を爲すを聞き終りて、一日中を空しく送れりと云ふ者をば、他の學生の食事を爲せる間、外に出して勞働せしむ。これは或は一害なきにもあらざれども、己を回顧して一日中に何か一事業を爲さざれば、終らずてふ有益にして必要なる習慣を養なふには、最も好き手本なり。かく一日を回顧して、己れは一日を如何に費やせしかを日記に記し、後より之を見る時は、爲すべき事業を怠たりし不愉快を感ずると共に、之を爲さゞれば滿足を得ざるの人となるべし。

睡眠

次に必要なるは睡眠の習慣なり、人の働と年齢によりて、一日廿四時間の中に、六七時間、乃至八九時間位は眠らざれば、健康に害あると云ふとは、道理の上より論ずるのみにあらずして、實際眠の足らざる時は、うと〳〵として、氣力に乏しきを見て知るべし。之に反して眠の過ぐる時は又た心地あしくして、事業を勵むの心なし。されば暫らくの忍耐を以て、一定の時間に眠り、一定の時間に起き出づる事を習はゞ、之がために一生の健康を保つことを幾計りぞや。睡りの足らざ

るとは、勿論不健康なれども、之を過ごすも亦た不健康なるは、殆ど食物を過食して、胃を害するに同じければ、もし一日十時も睡る人あらば、その二時間を儉約して、一日八時間づゝ眠るとせよ。その毎日の二時間づゝを以て爲す事業を積めば、一生の間には幾許の成功を見るを得べきぞ。實に一生の運命は、睡眠の中に封じありと云ふも、過言にあらざるべし。

怠　惰

怠惰と遊びずき、若しくは緩慢の性質と異る所は、恰も大人と小兒との差あるが如し。怠惰はつまり何事を爲すにも心重く、不活潑にして、今日爲すべき事をも、明日に延ばすと云ふ不健康なる慣を、そのまゝに捨てをくより生ずる一の習慣なれば、改めんとの勇氣を以て、日も、夜も、主義を曲げずして高き道德の觀念を以て、一の大切なる義務として矯むる時は、必ず正すを得べし。有名なるクエカー宗の醫師フオツルギール氏は云へり『余は己れの事業を利益のために爲すにあらずして、義務として之をなせり。何事を爲すにも、充分の暇を以て、全く打ち込んで爲さゝれば、成就せずと思ふは、間違なり。余は固たまりたる時間なきがために、勉强もなし得ず、事業も爲し能わずと思ふは、怠惰の證據なり。マダム、ド、センドルと云ふ夫人は、佛國女皇の侍女にて、毎日食事ごとに十五分間づゝ早く食卓の傍に待つが役目なりしが、その十五分間待つ暇を以て、己が勉强に屈强の時間と定めしが、ついには其間に一日一二卷の書冊を讀むを得るに至れりと。眞の勉强は少しの時間を儉約して用ゆるにあり。人の心は時計の如くねじを卷きし時のみ强く打つものにあらずして、働けば働く丈け、精神は慥かになり、事業に面白くなり、さては怠惰のものも勤勉なる人となるなり』と。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

無慈悲なる夫妻

やぎ生

年老ひたる夫婦あり、二人の間に長男次女の二子ありて、土地家屋公債等夥多所有し、豊かに世を送くりける。此老夫婦極随の無慈悲者にて、哀れなる乞食の救助を求むることあるも、一文だに與たるためしなく、又門前を行商ふ人は、此家にて無暗に直切らるゝを厭ひ、大抵は口を噤めて此門を過ぐ。近き邊りに住むものは、皆厭がりて突合ふものとては絶へてなし、偶會することあれば、止むを得ず片語を交ゆるのみ。いつぞや厨に肴を置き忘れて、猫に獲られしことありしが、己が不注意なりしを顧みずして、猫を惡みこれを捉へて、滅太打に撃殺し、或るときは犬が畑を荒せりとて、これも咽を絞めて殺したり。犬猫に罪なきにあらずといへども、元來畜生の爲せることにて、畢竟自己の不注意より其侵来を招きしなれば、まさかに殺す程にもあらざるべきに、其邊の斟酌は少しもなく、生物の命を奪ふを何とも思はず。又愛する兒を懲すに於ても、亦苛酷にして、遺尿を爲せしときは、飯を斷ち釣瓶に縛して井戸へ下し、或は柱に縛する殆んど一日計り、兒は聲を限りに助けをもとむるさま、實に哀れなり。遺尿は殊更に爲すものにあらず、寢に就くとき注意して用便せしむれば、爲さゞるべく、尚これにても爲すことあらむか、そは腸胃を害ねたるものにして、宜しく醫の診察を乞ふべきに、さはせずして小兒の罪と爲すは驚入たることなり。而して此兒が遺尿は別に原因あり、雨天の日學校に通ふとき、足袋羽織に泥土の斑點にても染めたらむには、酷しき刑罰をうくるによりそれが怖さに、如何に冷ゆるも足袋を穿たず羽織を着せず、内々これを學校包に入れて通ひしより、寒冷極まつて此病を醸せしなり。兒の學友時々訪ひ來るとあ

るも、疊の裂るゝと、菓子を與ふるを厭ひて『○は遊びません』と、御世事もなく斷りつくるより、此兒とは誰も遊びを爲さず。學校より歸るときは日沒迄も復習せしめ、休日といへども遊びの時間を與へず、されば兒も涙をのむで、終日讀書す、しかしながら遊び盛りの小兒、いかでか謹讀するを得む、天井を見て蛙鳴蟬噪するのみ、老夫婦は其聲を聞きて、扨は勉强し居れりと、心を安んずるなり。斯くの如く小兒を酷に罰する故、常にこれを惡むのかと思へば、事實決して然らず、學校より歸宅十分も後れたらむには、起居安からずして、必ず迎に出づるを例とせり。

世の中には斯くの如き家庭もあり、而して最も憐むべきは此小兒なり、かゝる家庭に敎育をうけつゝある小兒は、みだりに人を狐疑し事物に接しては叱言を怖れ、戰々として日を送るのみにして、快樂ある日は蓋し尠なからむ。誰も猛省すべきことなり。

清淨なる臺所

追々暖氣となるに隨がひ、家内の凡ての所を清潔にせざれば、物は黴び、臭氣鼻を衝くに至るべけれども、殊に臺所は臭氣のみに止まらずして、病の元となるべければ、格別丁寧に、隅々の塵迄も殘こらぬ樣に掃除すべし。其中にても最も氣を付くべきは、水瓶の底と、その蓋なり。水は食物の中にても、毎日欠べからざる品なるが故に、之に虫の生じ、若しくは腐敗物の入る時は、何より恐ろしき病源となるべし。殊に流し近かくに水瓶を置く家にては、その蓋を常に忘れず、閉ぢざれば、飛ばしりの入るとあるべし。不潔の品等を洗ふ盥は、成るべく臺所に遠き處に置くべし。

次ぎに空氣の流通を好くし、天氣の好き日には桶、手桶は勿論の事、臺所の戸障子を全くはづして、乾燥せしむるとを勉むべし。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

見ゆる物品は、能く洗ふを得べけんも、燒きもの丶德利、瓶の類は、遂におろそかに成り易すければ、出來得べくば硝子瓶となすを良しとす。ことさら牛乳の瓶は容易すく腐敗するの恐あれば、三日に一度位は炭酸曹達を以て、之を洗ふべし。

食物の戸棚は云ふ迄もなく、掃除の行き届きたるを可とす。乾物、野菜の如きものと、煮上りたる物等とは、置場を同ふすべからず。凡て沸騰せざる品には、多少の虫なきを得ず。之を共に置く時は、虫の傳染するの恐れあるべければなり。器の奇を好む人は、垢じみたるを反て風流とし、垢の付きたるを洗らわぬ人もあれど、こは恐かなる事なり。品物は飽く迄も清潔にして、垢のなきこそ好けれ。磨粉にても、ソーダにても、石礆にても付けて磨くべし。

冬中は物の不由自の日もあらんとを許りて、多ぐある日に、多く物を買ひ置くもよけれども、是れよりは野菜物等は、日一日と安すくもなり、又た溜め置く時は、葉は溶けたる如くなりて、腐敗し、そこより虫の生ずるとあれば、明日一日に使用すべき品は、今日より考へをき、明朝八百屋より全く買ひ集め、成るべく溜めざるを可しとす。

妻君の氣質は最も好く臺所の間に見るを見べし。何程顏を磨がき、衣物を好む人なりとも、之れは清潔をすく人とは云ひ難し。書を讀み、養生を論じ、衛生を談ずるとも、臺所に虫生じ、水腐敗しては、何の功もあらざるべし。一家の主婦にして、臺所の治まらざる位にては、その妻君は、とても良妻の中へは數へ難たかるべし。

料理法

去らんとする蜜柑の料理

一と度病人の口を樂しましめ、啼く子供の涙を止とめし蜜柑は、今や一年間の暇を告げて辭し去らんとす、いざ別れの時の記念として之を蓄ふるの法を記さん。霜ふり蜜柑は保存するに最も良き一法なり。之を作るの法は別にむつかしくもあらず、蜜柑のつぶれざるものを横に輪切にきりて、之を土鍋に入れ、砂糖を適宜に入れて、蜜柑より出でたる汁にて、一二時間沸騰せしめ、皮の半透明になりたるを度として、引き上げ、汁と蜜柑を別の器にうつし、蜜柑のみを籠にて日光に旱すべし。かくて旱し上る時は、黄なる蜜柑の上に、白き砂糖の粉ふき出でゝ、恰も黄金に銀細工を施こしたるが如く、美しき事云わん方なし。之を鑵等につめをく時は、夏迄も、秋迄も、いつ迄も腐敗の憂ひなし。只た恐るゝは餘り美味なるがために過食して、病まんとなり。

水上の落花

是れより魚の最も多き時候となりぬれば、一年間の滋養を、一時に取るの覺悟にて、山海の珍味を多く食すべし。多くの物を食するには、種々の料理によりて、手をかへ、品をかへて、用ゆる時は飽くとなし。鯛、平目の如き上等の魚なりども、毎日同し煮方にては味なからん。今其料理の一二を記るさんに、水上の落花と稱するものあり。之れは鯛、平目、何にても魚を三枚にをろし、皮と骨とを能く去りて、擂鉢に入れて擂りつぶし、薯蕷と、鷄卵の白身とを入れて、更らに能く擂りまぜ、別に鰹節のだしにて薄醬油のすまし汁を作りて、先きの擂りしものを、少しくのばして、之を一さしづゝすくひて、沸騰せし白湯の中に浮ぶる時は、花の亂れたる如き形となるべし。之れは吸物の身として、美味なり。もし能く固まらずんば、少量のうどん粉を混ずるもよし。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

鱸の腸づめ

鱸にかぎらざれども、餘り太と身ならざる魚の鱗を去り、腹わたを丁寧に去り、暫らく籠に上げて水氣を去り、尚ほ水氣の去らざる時は、布巾にて拭ひ、その腹にパンとバタとを混じて、つめ込み、十分ふくれし時、沸騰せし鹽湯の中にて煮るべし。湯には胡椒を入るゝもよし。

蒸やき

鱸の如き魚の、鱗と腸とを去り、能く洗ひて一日計り食鹽の中に入れをきて、後ち皮と頭と、鰭と、尾とを去り、その腹にバタ、芹、細かに刻みたる葱、麵包の屑粉などを詰め、その腹を一寸針にて縫ひ合せ、鉢の全躰へバタを塗り、麵包の粉をかけて蒸し燒べし。是れ又た魚を食するの一法なり。

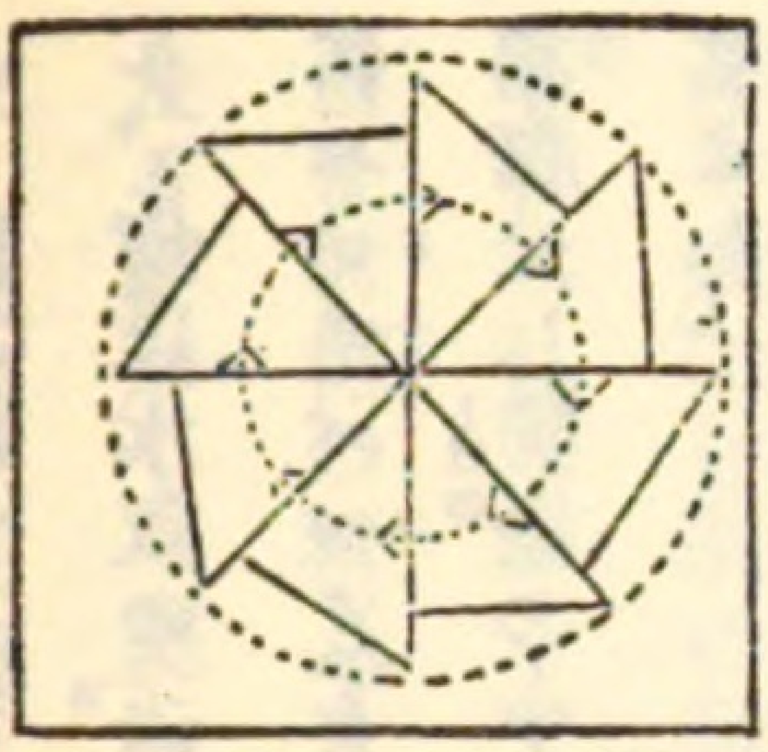
手藝案內

羽織の紋

羽織の紋は大低染抜と貼附の二方に據る、(別に縫附あれど)染抜きとは白地の羽織地を紺屋に托し黒又は其他の色に染め紋の處丈けを白に染め抜くをいふ、これは自宅にて爲すこと甚だ困難にして、到底素人の宅にて爲すべき事にあらねば染抜きの事は玆には記さず、玆に案內するは縫附紋なり、貼附紋は譬へば色物の反物を買ひ、或は無紋の羽織に已が紋處を附けんとする時殊に必要なり。羽織の紋は一寸目に立つものなれば紋の格好悪しき時は甚だ見苦しきものなれば、縫附紋を爲さんとならば極めて注意あるを要す、それは第一に知るべきは紋の割方、折方、及切方なり、慣れて居れば誠に造作なき業なれど手慣れざる人は梅鉢の紋一つも製し得られず、尤も紋の割方には幾何の畫法を用ゆ

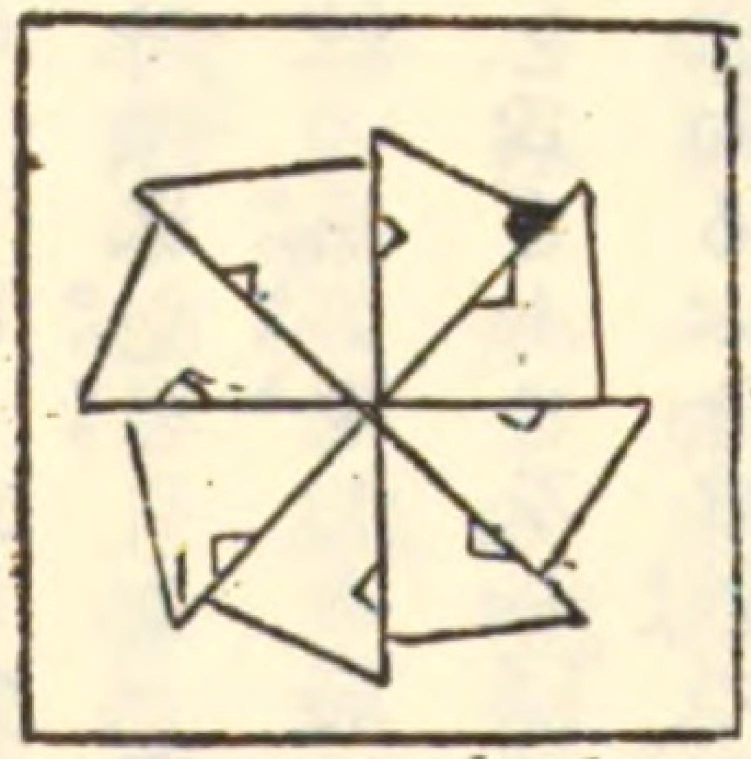
る事肝要なり、左に紋の割方と切方とを示さん

割方――紋の種類は非常に多くして其數幾千なるを知らず正紋のみにて一千餘種あるが上に、替紋、洒落紋、伊達紋等ありて追々新工夫の紋湧き出づるを以て、其割方一定せずと雖も、大抵三つ割四つ割五つ割六つ七つ八つ九、十、十二、十四、十六、十八、二十に及ぶ、其紋の複雜なるに從ひて割方も複雜なると知るべし。古式紋の割方は圓き線端を等分し記點を置きて分劃たれども、當時の割方は多く「コンパス」を用ゐ幾何學的に



甲

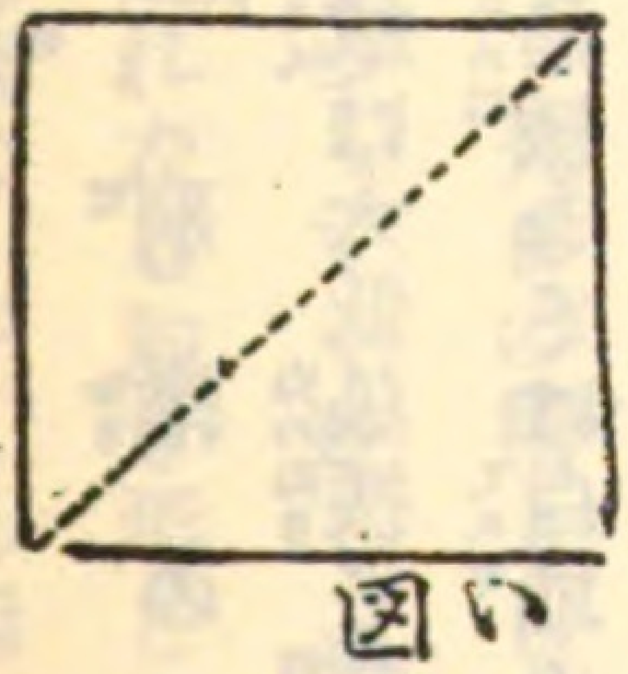
下描を書く、則ち（甲圖）の如きは『風車』の紋にして、八つ割にしたるものなり、則ち一角に四十五度の鋭角を保たしめ、始めて（乙圖）の如き『風車』を得るなり、而して他の紋形に於ても「コンパス」と定木を用ゐ此『風車』の紋の例に倣ひ、工面工夫して己が好の紋々を書き玉へ、玆に案內するよりも速に出來し玉ふこと疑あるべからず。



乙

折方及切方――折方と切方にも種々あり一度折にして一度に兩半を切り拔ぎ得るものあり又は二つ折にして其各四分の一半を一度に切拔ぎ得るもあり、三つ折にして各其三分の一半を一度に切拔ぐものもあり、いろ〳〵樣々なれども、左に其三四例を示さん。

一つ折。これは各半同形の種類に屬する紋形を切る折方なり、則ち先づ四方形なる布帛の一角より一角に斜



い図

ろ図

に折りて三角形と爲す則ち（い圖）の點線より斜に折れ

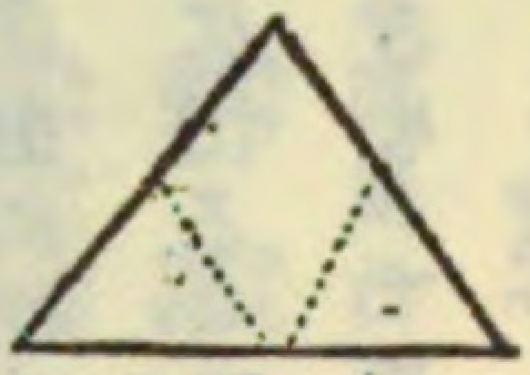
ば三角形となる、これに己の好む紋（但し單箇なる紋と知るべし譬へばろ圖の如き蛇の目紋其他花又は葉の片軸を得らるべし）を書きて其餘地の處を切り放つべし。

二つ折。これは二度折りて四半同形又は兩半同形の紋を切ること次の如し（に圖の丸に二つ引紋を得）

は圖

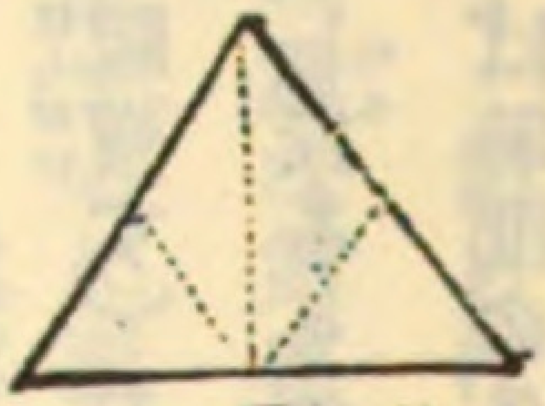
に圖

三つ折。これは三度折りたるものなり、一度方形なるものを、一角より一角に折りて三角形と爲し、其三角形を二度折りて切り拔く次の圖の如し、


ほ圖

へ圖

五つ折。四度折りて切り拔くものにして四半同形又は八半同形の紋と爲す、其の折方及切方の一例は左の如


と圖

ち圖

則ちと圖の如く一度三角形に折りたるものを、更に點線の導く處に從ひ、ち圖の如く折りたる形と爲し、其上に記せるものを餘して切り拔けば、直ちに丸に十字の紋形を得べし、其他五つ折以上あれども一々記載するに遑あらず、讀者試みに紙片にても折りて思ふ樣なる記點を畫き剪刀又は小刀にてチョキ〳〵切り拔き玉はゞ、不思議なる紋形を得らるべし、而して如何にせば己が欲する紋形を得んと、一工夫するも消閑の一與ならずや。紋の折方及切方は縁日又は大道にて賣る紋形書なるものあり、價僅に端錢に止る、購ひ得て手

本とするも宜し。

扨紋形を自由に切り得るやうにならば、縫附紋を爲して誰が前に出るも耻しからず、折りて切り拔ぎたるものを用ゆるも、「コンパス」の導く所に從ひ小刀の先にて切り拔ぐも隨意なり。勿論貼附紋とする布帛は共布帛を用ゆるは申すまでもなく、譬へば羽二重地なれば、紋の布帛も羽二重地を用ゐ、七子なれば七子、奉書なれば奉書を用ゐ米糊にて貼りつけ臺にかけて能く引張り一針縫にして紋の端を細かく羽織地に縫附くべし、素より糸は白の細き絹糸を用ゆべし。

昨今流行の羽織は重に黒八分色物二分の割合にして流行織物は男子は七子第一羽二重之に亞ぐ、奉書も行はれ、博多織のドッシリしたるものを着るものもあり、女子は黒縮緬に少さき貼附紋をつくれども小紋織又は縞物には用ゐず、小紋織の如きものには共色(譬へば羽織の地が空色なれば紋も空色にす)の縫附紋を附するものあれども、始めより染拔きのもの多し。

紋の個所に就き目下の流行は、三紋七分五紋七分の勢にして一つ紋は誠に曉天の星の如し、紋の大きさは男子にて曲尺一寸內外女子には六七分の處最も多く見受けらる。

絹及び木綿の漂白法

絹及木綿の漂白法には幾樣あり、理化學的の方法を除き玆には簡易なる漂白法を案內すべし。第一絹晒(或は絹練)は糸又は布帛地を練りて其ゴム質を去り其色を純白ならしめんには譬へば糸又は布帛地の重量に對する一割五分乃至二割五分の練石鹸(藥舖又は西洋小間物屋に販賣す)を溫湯に溶かし、其中に生なる絹の充分浸水したるものを麻袋に納め二三時間(生絹の重量多ければ時間の久しきを要す)も煮沸せしめ、それより一たび釜の中より麻袋を取出し、前同量の石鹸を加え再び煮沸すると一時間餘にして釜下の火を消し、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

暫時にして生絹に對する百五十分乃至二百分の稀硫酸水か、若しくば微温なる曹達水を以て能く〳〵洗滌すればゴム質を去り純白色を得ること疑ひなし。

木綿糸又は布帛地の漂白法は、單に純白色となさんには、水に浸して絞り上げたるものを、「コロルカルキ」(藥舖にあり)の溶液中にしたし置くこと一夜にして取り出し、之を清水にてよく〳〵洗滌すれば可なり、若し漂白して染色にせんとならば「カルキ」漂白法を用ゆるに及ばず、釜中に木綿を入れ煮沸すること大低二時間餘(重量の輕重により煮沸時間に長短ありと知るべし)にして一夜放置して後に釜中より取り出し水洗すれば「カルキ」漂白の如く純白に至らざるも、亦以て染色用とするに足るなり。

養蠶術 (承前)

桑――桑は養蠶中最も緊要なるものなることは茲に申す迄もなし、然しながら茲には婦女の養蠶術にのみ重きを置きて記載する積なれば、桑の事は概略の事を記するに止まるのみ。

桑の種類――始めは野桑一種類なるに相違なかりしも、養蠶の業次第に開發するに從ひ、幾十種の畑桑なるものを生ずるに至りぬ、畑桑の中には種々なる名稱あれども、一々記述するに遑あらず、唯だ之を早、中、晩の三種につき説明を爲せば、譬へば『九紋龍』と呼ぶ畑桑は早、中の間に位し、坂東は中、晩の間に位するものなるが如し。而して此早、中、晩の三種の植付につき一言せん、惣じて桑葉も成育の極度を過ぐれば寸度人畜の老衰したるが如く、强硬にして乾燥に過ぎ、到底滋養分少なきものなれば、蠶兒には成育の中途なる者を與ふ可し、斯くするには是非とも早、中、晩の三種を培養せざるべからず、早、中、晩の三種を培養して、始めて一齢より五齢に至る蠶兒の食桑に適應し、常に滋養分の多きものを給し得べし。掃立の毛蠶には早桑

の嫩葉を與へ、三齡前後の蠶兒には中桑を給し、五齡の蠶兒には晩桑を食はしむ、而して稚蠶は躰軀短小なれば隨て食桑も多からず壯蠶より老蠶に至りては殊に多食するものなれば早桑一分中桑三分五厘、晩桑五分五厘の割合に由りて植付けて宜しかるべし。

土地の適否――桑樹も亦他の植物と等しく肥沃の土地に適するは申すまでもなし、然れども桑樹の種類により或は寒國に適するものあり、或は暖地を好むものあり或は山中に利あるものありて(夫の山中高助の如き)一定せずと雖も、桑苗買入の際成るべく自己の住地と寒暖の大差なき地方より購ひ取り如何なる土地に適するやを確知して栽植するを要す。

桑苗の仕立――桑苗の仕立法に種々の方法あり則ち實蒔、採木、挿木、接木、壓伏は其の重なるものなり、桑樹の性は恰も薩摩芋苗の根なくして根を生し、又は其の蔓の地に觸るゝ所より根を生するが如く、桑樹も至つて土地に黨し易きものなるを記臆すべし。右に述べたる種々の仕立法を細に記述せんと欲すれども、事甚だ煩雑に渉り到底其詳細を盡くす能はず、且つ內職又は婦人の手業には大なる關係もなければ玆には省くことゝなせり、又桑の樣造法、(根苅、中苅、高苅、立通の四法あり)植附法、(季節、位置、距離、植方)桑樹培養法等あれども是等も省略する事となしぬ。

害蟲驅除――害蟲の事を少しく記載し置くべし、桑樹を害する蟲に、尺蠖、桑虱、鐵砲蟲、毛虫、小金虫等の種類あり、中にも尺蠖、桑虱、鐵砲蟲は最も恐るべき害蟲と知るべし。かゝる害蟲は氣候の爲に一時に發生するものにあらず、其母蟲が土中又は樹枝に産卵し置きたるものが、孵化して蟲となりたるものなれば、豫め其の卵を取りて之を燒棄べきは勿論の事にして、卵を產む田蟲を鏖殺せざるべからず、田蟲の羽化して蝶蛾若しくば蜉蝣となりて産卵するは、大低四月より

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

九月迄(即ち夏季の間)の間なれば此斯節を外さず、夜間田野に於て焚殺すことを忘るべからず。「びは蟲」(尺蠖の種類)は長さ寸餘にして通常の尺蠖の如く、色桑樹に類し一見辨知し難し、桑樹發生の頃、新芽を食ひ盡すものなれば桑芽發生せんとする頃、能く〳〵桑樹を撿して除却し去るべし。桑虱は其大さ粟粒の如くして白色を爲し桑樹に群生す、之を驅除せんには苦辛三十匁薭種三十匁を水五升に投入し、之を三升程に煮詰め折木石鹼十五匁を混入し、冷却したる後、如露の如きものに入れ、桑樹に撒布せば、忽ち桑虱の死亡すること疑なし。鐵砲蟲は樹材の組織中に蝕入し、其心髓を上下往來し、材肉を喰ふて生存し夏秋の頃、羽化して樹幹を蛻出し、或は外皮を嚙破り、或は齧斷して其傷口に產卵す、該蟲を驅除せんには、其の生存する穴隙を發見せば銅線の如きものにて刺殺すか、然らざれば粘土を塡塞して窒死せしむるを要す。毛蟲と雖も其害毒尠からざれば、發見次第速に燒殺すべし。

桑量と蠶兒の多少――養蠶家たるものは、己が有する桑量に應じて蠶を養ふは論を待たず、然れども桑樹に良否あり、栽培に巧拙あり、桑園に肥瘠の差あり且つ桑葉の繁茂一定せず、即ち繁茂の如何は事將來に屬するを以て、茲に一定の桑量を明言する能はざる以上は、蠶種原紙の多少も確言すべからず、併しながら大低上園なれば一反歩毎に蠶種原紙二枚、下園なれば一枚の割合に定め置かば大差なかるべし、尚ほこれより進んで插畫を以て蠶室の心得、蠶種取扱、蠶兒養育、繭の取扱、生糸製作等の諸件を記述せんと欲す。

社交一斑

流行の栞

春夢

流行夏向舶來品

目下日本にては晩春の候にて人は袷着時分なれもど西洋人は最早

夏の仕度に取懸り夏帽子の戴くもの弗々見受けらる左に本年の流行品の重なるものを列擧せん、（但し重に婦人及小兒用）

夏向小供用レース帽子――「ボンチット」并に「ハット」其流行形は圓の如し（代價は七十錢より二圓位迄）

同麥藁帽子――流行形は胡麻又は鬼編（代價一圓二十五錢前後より二圓五十錢位まで）

女帽子――流行形は差して昨年と變りなし、流行色は白、黒、茶、鼠等（代價一圓二十五錢より二圓五十錢位まで）

婦人用「メリヤス」――品は木綿を尙び色は白を用ゆ（代價七十錢より一圓五十錢位迄）

女禮服用長皮手袋――色は白又は薄茶（代價二圓五十錢より四圓位迄）

同皮手袋――色は前同斷（代價一圓五十錢より二圓迄）

絹手袋――絹メリヤス（代價六十錢より一圓五十錢位）

夏用靴襪――品は木綿若しくは麻を第一とす（代價四五十錢より一圓二三十錢）

夏用麻「ハンケチ」――流行形は縫又は「ヘム」（緣をとりたるもの）（代價一「ダース」三圓位より十圓內外）

同絹「ハンケチ」――（代價一「ダース」一圓二三十錢より八圓以外）

歐洲流行「コーセット」形は昨年と變りなく色は白、桃色鼠等なり

「ゴム」の製作品

織物社會に縮珍織が最も流行の勢力を擅ひ、男女の帶より紙入、煙草入、羽織の裏地、「ハンケチ」、帶留、又は下駄の鼻緒に至るまで、何でも漢でも縮珍の世となりたる如く、小間物社會に於ても「ゴム」の製作品が一般に流行する事となれり、併しながら縮珍の流行は貴族的なるが故に上中下を通して其勢力を及ぼす能はず、中等以上は其範圍にあり、「ゴム」の流行は平民的なるが故に、其範圍は中等以下にありと知るべし。

現今我國にて「ゴム」の製作品重なるものは、先づ第一は婦人の髮具なる根掛、櫛、簪の玉、花簪の瓣、タボ止め其他いろ／＼、髮具以外には洋傘の柄又は煙管筒等に用ゐれども、髮具は最も其多きを占むるを知るべし。「ゴム」を以て製したる製作品中、黒鼈甲に摸擬したる深彫蒔繪の櫛の如きは、一見眞物と辨知し難く、近來僞造物の巧妙になりたるに一驚する外なし、又象牙に摸擬して髮具又は煙管筒又は洋傘の柄に製したるものも、其色象牙に甚だ髣髴したりければ、之を人造象牙とも名けらる唯だ少しく生地に黃味あるのみ、これとて象牙は少しく黃味あるものなれば、差して障あるにあらず、又「ゴム」を以て根掛若しくば簪の玉を爲したる製作品は、珊瑚珠を摸擬すと雖も、これは似ても似つかず一方が餘り高價の珍品なれば、たとへ艶消を爲して巧に珊瑚然たらむしろも、素人の眼より見るも眞僞判然たり、又「ゴ

ム」製を以て白鼈甲に摸擬したる禮式用の櫛等あれども、到底眞物と比較せらるべきものにあらず、要するに「ゴム」の製作品は到底上等品なる珊瑚又は鼈甲等と其位置を爭ふべからざれども、中等以下一般の流行品となり、其勢力實に廣大にして、從來髮具に用ゐ來りし明石珠石珠、瑠璃珠、糯米珠等をして、殆ど其跡を絕たしめ「ゴム」製作品が其位置を奪ふに至りしは確なる事實なり、又「ゴム」の製作品は物に依りては瑠璃珠、糯米珠の如き下品にして脆弱なるものにあらず、派手なる製作品は品質の劣等を現はすと雖も、黑鼈甲等の如きくすみたる物品に至りては、其品其質和甲の上にあり（和甲にも種類あれども）「ゴム」製「すき櫛」の如きものに至りては、其の通徹の能きこと、他に匹敵を見ず、兎に角「ゴム」は左まで下等なる品物にあらず、品質は馬爪、牛爪製の間にあり、強きことは卽甲製の上にありと知るべし、然れども之にも利害得失の随伴するは、數の免れざる所なり。

「ゴム」が流行社會に勢力を得るに至りしは、先づ價の廉なる故に多くの需用を來たしたる事は申す迄もなし、次に「ゴム」は廉價なる品なれども、物によりては高等上品なる事、次に廉價なる割には長持する事、明石珠の如きは大寒の節は珠に割目を生ずるもの在れども「ゴム」製は此患なきが故に、北海道其他寒國に需用多き事が重なる美點なり、若し其欠點なる所を擧ぐれば火に燃ゑ易き事、溫暖に逢ひて反り又は曲り易き事、其證據は櫛にても少しく熱氣の強き人に挿せば反り返る事なり、又「ゴム」にて又心なし、煙管筒を製作し始めしが、暫時使用者の腰の邊にありしが、見事に反り返りて再び煙管を差し入るゝに由なかりし事ありしかば、今は木の心を入れて此患を防げる煙管筒流行せり、又ゴム製は硫黄、樟腦等を以て成立したるものなれば一種の臭氣ある事、又少しく粘氣ありて塵埃等の附着し易き事等は重なる欠點なり。

然れどもゴム製は價の廉なる割には決して下品なるものにあらず、確に平民的使用に適應するものなること疑あらず、價も十年前「ゴム」の珍らしき時には甚だ廉ならず、五十錢の價ある物品は現今にては十錢以内に下落せり、我國にて「ゴム」の製作品を營むものは未だ數個處に過ぎず、未だ其原料を外國に仰ぎ、日本にて日本的物品に製作す、譬へば根掛玉に製するには、外國より長く棒になりて恰も有平糖の如き原料を細かく切りて角を落し丸味を爲し、或は平なる原料を取りて花簪の瓣等を製す、我國にては近年「ゴム」の需用増加せりと雖も、外國に比しては九牛の一毛だにも至らず、隨て幾十萬の資本を卸して「ゴム」製造所を設立して「ゴム」を製造するも、金利に於て未だ損毛あるを免かれざれば、今暫くの間は外國品を仰ぐの已むべからざる事情あれども、追々我國に於ても「ゴム」製作品の需用が、髮具以外なる廣き場合に適應せらるゝに至らば、二十萬金を卸して製造所を起し、盛に「ゴム」の製造を爲すも可なり、然る時は「ゴム」の製作品は今日よりも廉價なるに至るべし。

流行の書簡箋

如何なる書簡箋が最も流行なりやと言はゞ、昨年頃までは矢張江戸川

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に模樣をすかし入れたるもの上等の部に行はれたれども、近來は江戸川と雁皮とを折衷したる一種の書簡箋最も流行す、江戸川は紙質美なれども厚きが故に多く掛目を食ひ、郵便用としては不經濟の點多し、然れども儀式上に係はる書簡は素より江戸川の書簡箋依然として第一位を占むると雖も、一般日用往復の用には前に述べたる江戸川と雁皮折衷書簡箋に越ゆるものあるべからず、これは墨附も宜しく筆滑りも澁滯せず、『雁皮』又は『薄葉』の如くチャリ〳〵厭な音もせず、郵書にしても大概なる文書迄は二錢で濟むこと雁皮と、差して甲乙あらず、且つ透入の模樣は其節々の花鳥風月をアッサリと散點するもの最も流行なり、譬へば昨今なれば、落花三五點水上に浮ばせ、都鳥の彼面此面に靜に春光を弄する模樣若しくば櫻や桃やの折枝若しくば垂柳風に靡く處若しくは藤花の水に映ずる處四季折々の風情によりて其模樣を異にすと知るべし。之に亞ける書簡箋は『薄葉』に模樣を透入れたるもの、其模樣の流行は同前樣、其次は上等の雁皮製にして以上は大抵一卷十二三錢より十五六錢の處最も需用多き由、唐紙の書簡箋は先づ不流行の方なれども價格の廉なる、所より使用するもの多し是等は始めより平民的流行なり。其外に一種新奇の書簡箋あり、其形は一卷にせず原稿紙の如く箋の一端に糊を貼し置き、使用せし丈を引離して使用する故小刀を用ゆるに及ばず、且つ引離したる丈は、糊にて固着し居れば、敢て散亂の恐なし、紙質は改良判紙の薄きものを用ゐ、十行若しくば十二行の縱罫を劃して橫罫を爲さず、前述の書簡箋と等しく花鳥風月の模樣を點す素より改良判紙なれば墨汁は少し滲めども、筆滑り至つて宜し、價は判紙半折五十枚を一帖として三錢五厘より四錢迄多數の需用あり。

夏向の髮具

夏向の髮具は勿論淡泊なるものを要することは申す迄もなし、されば櫛、笄も禮式用には矢張り冬季同樣白鼈甲を尙べども、其他の場合則ち不斷挿又は一寸外出用には上等には象牙製又は鯱牙製を用ゐ、中等以下には丁貝製又は「ガラス」製夏向の流行に適へども、「ガラス」製は品質甚だ劣等なれば之を用ゆるもの尠し、中挿の如きものに至りても白又は淡色の生地を好み、鯱牙等を見事に彫刻（透し彫）したるもの最も流行し、佳麗亦極りなし、要するに夏向流行品は輕くして淡泊なるものが第一なるは茲に再言するに及はず、今茲に近來流行の簪を示さん、これは至つて輕々しくして且つ淡泊此上なきものなり。

上圖は則ち燈心に蠅の泊りたるものにして、燈心は象牙を以て製し、蠅は羽根を丁貝等にて製し、細かく細工の出來たるものなり、蠅は天井に身を逆にしても墜落するの恐なく、燈心は吹けば飛び散る程のものなれば、其輕きこと天下其比を見ざるべし。根掛玉に於ても然り丁貝製又は象牙製に輕く蒔繪か彫刻を施したるもの行はれ、又は象牙か人造象牙（ゴム）の薄き臺に丁貝製の菊、牡丹

等を附着したる根掛又は寫眞版製根掛追々流行の傾あり。手柄の如きものに至りても餘り厚濃色ものは感心仕らず淡茶、淡紅等の淡色最も可なれども、これは其人の年齡によりて撰擇して然るべし。目下花簪の流行は藤花第一牡丹花等の時候物案より兒女の爲に愛せらる、細工は相變らず摘み製第一位に居ると知るべし。

化粧品

廣き意味よりいふ時は何物として化粧品ならざるはなし、山川草木は地球の化粧品なり、紅粉衣裳は人間の化粧品なり。人として『美』を好む以上は『美』の裝飾を爲すは人意の然らしむるものなりと雖も、『美』を爲さんとして却つて天然の『美』を損傷する事往々なり、素顔の美と紅粉を施して化粧せる美とは其差如何、其害啻に鉛毒を醸して天然の美を傷くるに止まらず、然しながら世界の婦女が鬢髪に油を塗り顔面に白粉を用ゆるは、日本も西洋も同じ事にして人情自然の發現なれば强て咎むるに及ばざれど、世の投機商が此機に乘じて種々なる化粧品を發賣し、「色白くなる法」とか「若し效能なければ何百圓を返上する」とか擴大なる廣告を爲して婦女子を瞞着するもの比々なり、之を知らずしてウカと其廣告を信じ金錢を惜まざる人こそ氣の毒なり、化粧品を使用するは別に差支なきも其撰擇が最も肝要なり、五十錢の傳授料を出し劇藥を塗りて顔を燒くは笑止の事ならずや、色白くなる何々水を着けて却つて顔をあらすは氣の毒の至ならずや。目下種々なる化粧品白粉下雨後の筍と一般此處にも彼處にも發賣し始むれども、其の多くは一滴の原料に百倍の水を加へて巧に世人を惑はし、甚しきに至りては、舶來香水の空瓶に水を加ねて一寸搖動かしたるものを一瓶幾何と立派に看板を揚げて發賣するものあり、されば目下信用すべき化粧品は誠に稀なれども、或る使用せる人の話に此頃化粧品社會に流行の勢力を得つゝある近頃發明松田の白牡丹製の『牡丹水』は、其原料の善にして異香馥郁且つ身體を艶美ならしめ、眞に化粧品の資格ありとの評判あり、價は他の山師的の發賣品に比して聊か高價なる由、白牡丹老舗の名は、能く『其の品質の善惡を證するなり。

最流行の小兒衣裳

男兒には黒羅紗の水夫形帽子洋服、女兒には幽禪縮緬の被布、其詳細は說明を要せず、繪樣によりて明なり。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

雜録

○滿足　エピクテータス

滿足は富の多きに因らず欲の少きに因る

○幸福　ラスキン

穀の長ずるを見、花の開くを眺め、鋤持つ手をとゞめて長き息つき、讀み考へ、愛し、祈る、此等は人を幸福ならしむるものなり

○熱心　ゴールドスミス

余は何事にも熱心ならざる人を好まず

杣山城（口繪の畫解き）

晩鴉三つ四つ二つ雲忙がはしげなる空を縫ふて飛び、峯の松風閧の聲を混へて颯と渡りては斷へ又續けり。馬を下り太刀を杖いて憩へる幾個の武者は、今しも酣戰より還りしかと覺ぼしくて二筋三筋の箭を鎧の袖に折りかけぬ。顧れば城中殘れる士卒幾何もあらず、目を擧ぐれば城外戰雲近し。恰も是れ門開ひて邊月近く戰苦んで陣雲深きもの。

此は是れ南北亂の昔越前の國杣山城に立て籠りたる瓜生保が、其弟義鑑源琳重照と南軍の總督新田義貞の弟義助の子に脇屋義治といふを大將として北軍の將高師泰と戰ひしが、時利ならずして保義鑑は討死し、源琳重照敗卒を率て引還したる時の光景なりき。

去れば流石に猛き武者も何となく心細げに見えて、城守の程も心元なかりしに、保の母は常に變りし景色もあらず、靜々として大將の前に盃を持出で、申すやうは妾が兒不肖にして此の度の戰に打負けぬれど、二人のもの戰死したれば罪を償ふにも足りなんかし。兒等はもと國の御爲めに事を擧げしなれば、賊を亡ぼしたらんには、たとひ數多の子を失ふとも妾はゆめ悲しと思ひ侍らず。然るに今は猶二人の子の存へ居れば、再び事を擧ぐるに足りぬべし。是れ妾が歎きを棄てゝ、共に喜びまゐらする所以なり。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と。因て酒を勸めける。列座の面々聞て感激せざるものなく、皆身命をすて、賊を亡ぼさんと勇み、杣山城中の旗色は再び鮮明になりけり。

時事一斑

布哇の治外法權撤去

布哇に於ける治外法權は撤去せられたり。故に自今布哇國民は現今施行し及び將來施行する我が法律命令の下に、我邦何地にても往來住居し、其居住地に於て家屋倉庫を借受け、又は總て適法の業務を營むことを得るなり。

評者曰く、蕞爾たる布哇國に治外法權を撤去せしめたりとて何ぞ事々しく言ふに足らん。吾人は英米露獨佛伊の諸國に對しても、亦同樣の快事を見んことを切望するに堪へずと。

關西女學の輿論

關西女子敎育大會は大坂、神戸、愛知、靜岡、岡山、松山、鳥取、熊本、長崎等に於ける女學校三十餘より會せられ、去る六七日を以て大坂土佐堀梅花女學校に開會せり。而して幾多の問題討求せられ、且つ今後年々定期開會をなすことに決し、又明治廿八年には、大博覽會開會中を期し、京都に於て、同會自から主となりて日本全國女子敎育大會を開くべしと議決したり。

日本の科學

日本の科學は已に大に幽微高尙の域に入りたるものもありと云ふ。其隱れて狹き專門學者間に在るは惜い哉。

科學の發達は文化の發達なり。天下の學者は盍ぞ其普及をとれ謀らざるや。吾人が平民科學の布敎を望むこ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と久し。

社會警醒の一傾向

蓮門敎會が最も忌はしき淫祠なりとは久しく世の噂さしたる所なりしが、「萬朝報」大に其醜事を摘發し、遂に爲に誹譏の訴を受けたり。而して「二六新報」亦天理敎會を摘發する所あり。其眞其僞は、事實聰に之を證すべし。然れども覆はれたる醜事の天下に多きは、蓋し疑ふべからざらん。而して社會の眼が注で漸くに其裡面に向へるを見れば、豈社會警醒の一傾向として之を賀せざらんや。

慘酷

刺客洪鍾宇の爲に上海の客舍に刺殺せられたる金玉均の死屍は、刺客と共に清人の手より朝鮮に送られ、我が大鳥公使等の勸告したるにも係はらず、朝鮮政府は之を揚華鎭に於て、寸斷し、其頭と目と手足とは之を獄門に懸け、其餘を之を地上に遺棄したりと。聞くも慘酷なることゞもなり。

春光若夢

春光夢の若く、新綠地に滿てり。殘紅を覓めて野邊に去れば、見るべし

しろ妙の袖ふりはつてかげろふの
もゆるしば生にすみれつむなり。

山寺の春の夕暮を來て看れば、見るべし

長閑なる、春の山路に、
咲く花を、見てや後れし。
夕月を、待ちてや暮れし。
眞柴おひ、歌ひつれくる、
山がつが、聲すなり。
家路とめ、今かへるらし。
里さして、今かへるらし。
眞柴おひ、歌ひつれくる、
山がつが、聲すなり。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

商標

ブランドレス膏
（氣孔付）

僂麻質○流行感冒

腰痛○痰咳

風邪ニ偉効アリ

定價壹枚金參拾五錢

日本一手販賣元 横濱廿八番 米國貿易商會

特約關東大販賣所
東京日本橋區本町四丁目 藥種問屋 島田久兵衛
同 同區本町三丁目 藥種問屋 島田忠兵衛
同 同區室町三丁目 藥種問屋 資生堂

關西大販賣所
大阪東區道修町二丁目 藥種問屋 小西儀助

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治廿五年九月十四日遞信省認可

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍印行

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA